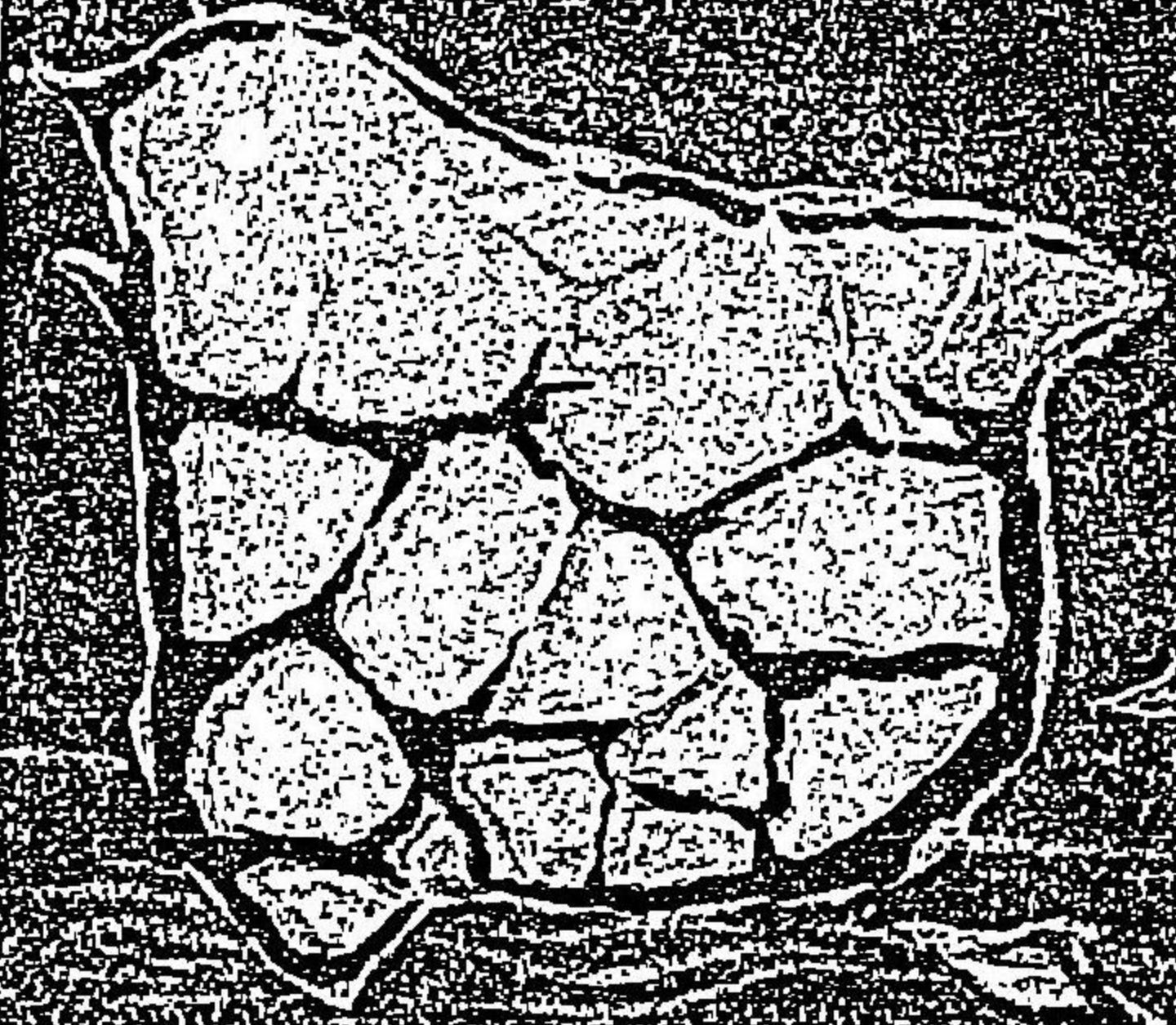
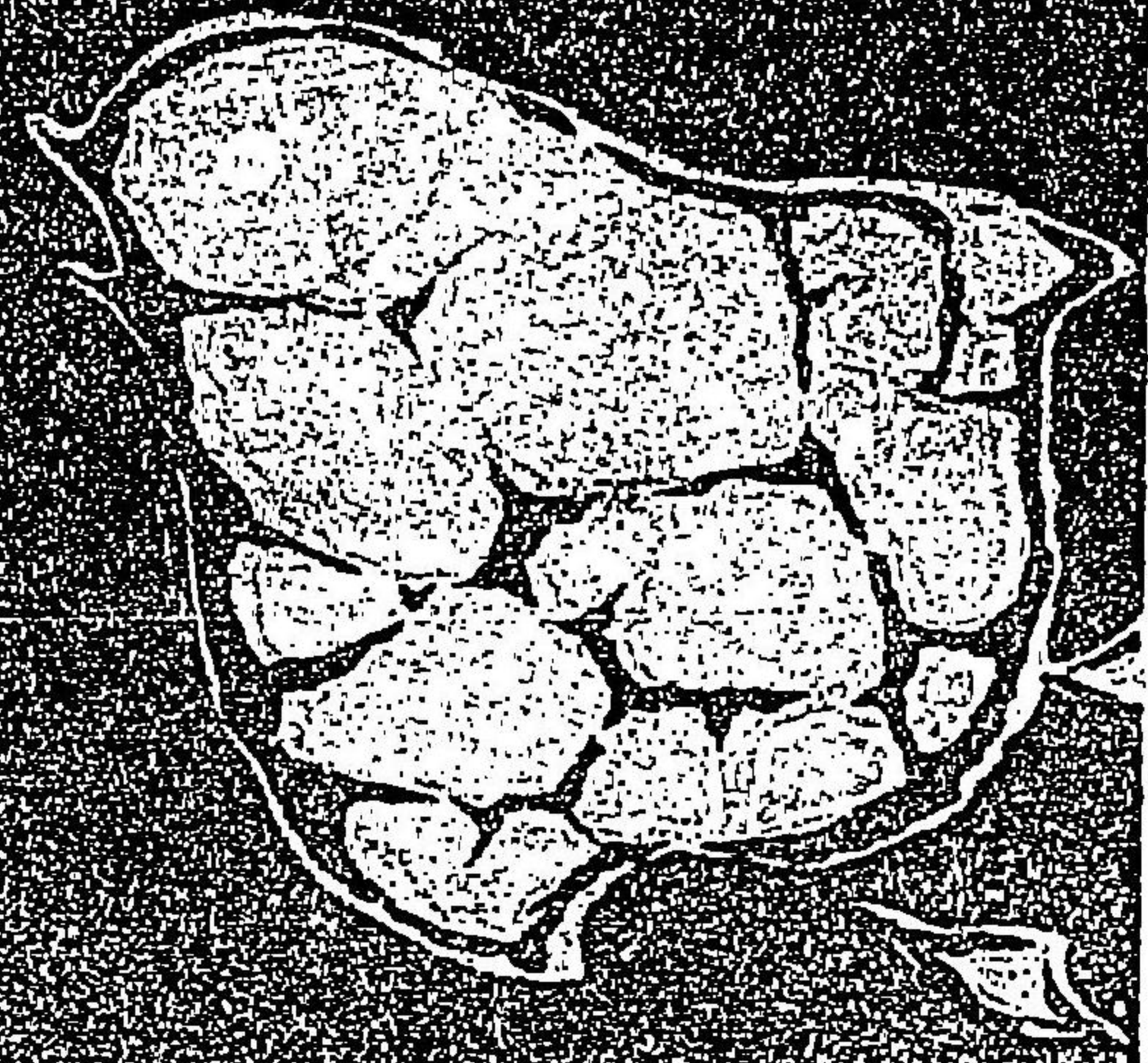


特 72
139

生田流
筆曲新譜
卷之一
四版



~~306~~
~~648~~

井上胡蝶著

生田流

箏曲新譜

定價

卷一	金壹円拾錢	送料
卷二	金壹円拾錢	各六錢
卷三	金壹円拾錢	代金引替
		拾六錢増
		海外全
		廿四錢増

曲譜目次

- 卷一 四季の花・門松・鶴の聲・黒髪・六段・亂の曲・八段・金剛石
 四版 夕顔・新高砂・越後獅子・千鳥・茶音頭・春の曲・小督以上十五曲
 卷の 春影・朝外出・六段前歌・難波獅子・末の契・松竹梅
 二 残月・秋風・八重衣・冬の曲
 以上十曲
 卷の 松盡・萬歳・八千代獅子・雪
 九段・巖上の松・新
 三 雪月花 凱旋喇叭 四季の詠・夏の曲・秋の曲・以上十一曲

井上胡蝶著

大新版
生田流
山田流

家庭新譜箏曲の栞

第一定價金壹円 送料六錢
 壹代金引替 拾六錢 増
 輯 海外全 奉拾四錢 増

曲譜
目次

教へ歌 四季の花・荒城乃月 戦友・門松・ことぶき・春雨(山田流)
 六段・七州・龍盡レ・御製乃曲・水は器・千鳥・菊水・(山田流)
 那須野(山田流)・御國乃巻

新案特許
號四〇四一二

琴調子笛

ニッケル製金壹圓五拾錢 特別製金貳圓 (送料八錢)

新案特許願第六六四三三五號 各地琴曲大家御證明
 箏曲通信教授所御撰定

琴糸締機

定價
 甲種特製四円五十錢
 甲種並製三円五十錢
 外送料八錢

特 22
139

(詳細なる説明書は郵券封入照會あり)

福岡市外馬出二一三〇

發行所 箏曲通信教授所

流田生
 井上胡蝶著
 箏曲新譜
 家庭新譜箏曲の栞
 琴調子笛
 琴糸締機

大新版 生田流 家慶 新譜箏曲の栞
 山田流 音樂 第一定價金 壹圓 送料六錢
 壹代金引替 拾六錢 增
 輯(海外全) 參拾四錢 增
 目曲 數へ歌・四季の花・荒城乃月・戰友・門松・ことぶき・春雨(山田流)
 六段・七州・龍蓋し・御製乃曲・水は器・千鳥・菊水・(山田流)
 那須野(山田流)・御國乃暮。

新案特許 號四〇四一二

琴調子笛

ニッケル製金壹圓五拾錢 特別製金貳圓 (送料八錢)

新案特許願第六六四三八五號 各地琴曲大家御證明
 箏曲通信教授所御撰定

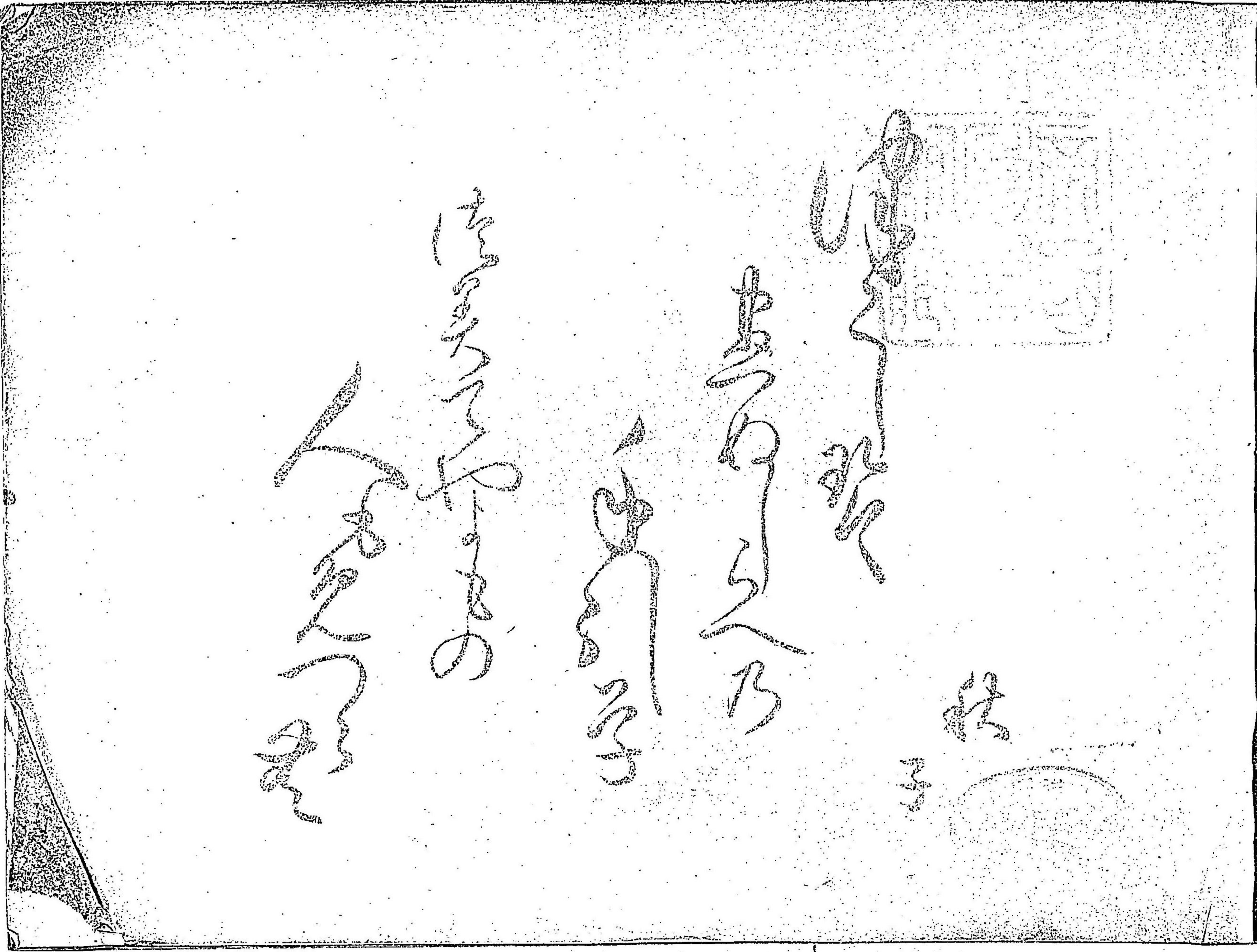
琴糸締機

定價 甲種特製 四圓五十錢
 甲種並製 參圓五十錢
 外送料 八錢

特 12
 139

發行所 福岡市外馬出二一三〇 箏曲通信教授所

(詳細なる説明書は郵券封入照會あり)



井上胡蝶著

田生流

箏曲新譜

定價

全五冊
 卷一 壹圓
 卷二 壹圓
 卷三 壹圓
 卷四 壹圓
 卷五 壹圓
 全五冊 五圓
 外金封筒
 外金封筒
 外金封筒
 外金封筒
 外金封筒

曲譜目次

- 卷一 四季の歌、松竹梅の歌、八段、全剛石
- 卷二 春日影、朝外出、六段前歌、難波御子、末の契、松竹梅
- 卷三 残月、秋風、八重衣、冬の曲
- 卷四 春の歌、萬歳、八千代御子、雪、九段、巖上の松、新
- 卷五 宵の歌、凱旋喇叭、四季の歌、夏の曲、秋の曲、以上十一曲

新編箏曲の

新編箏曲の... 四季の歌、松竹梅の歌、八段、全剛石... 春日影、朝外出、六段前歌、難波御子、末の契、松竹梅... 残月、秋風、八重衣、冬の曲... 春の歌、萬歳、八千代御子、雪、九段、巖上の松、新... 宵の歌、凱旋喇叭、四季の歌、夏の曲、秋の曲、以上十一曲

琴調子笛

新編箏曲の... 四季の歌、松竹梅の歌、八段、全剛石... 春日影、朝外出、六段前歌、難波御子、末の契、松竹梅... 残月、秋風、八重衣、冬の曲... 春の歌、萬歳、八千代御子、雪、九段、巖上の松、新... 宵の歌、凱旋喇叭、四季の歌、夏の曲、秋の曲、以上十一曲

琴糸締機

（詳細なる説明書は別紙に入附あり）

発行所 福岡市外馬出二二三〇
 箏曲通信教授所



流傳
 箏曲
 通信
 教授
 所
 福岡市外馬出二二三〇

特
 139

井上胡蝶著

大正
新編
生田流
山田流

家庭
音樂
新譜
箏曲の
集

第一定價金壹圓 送料六錢
第二定價金壹圓 送料六錢
第三定價金壹圓 送料六錢
第四定價金壹圓 送料六錢
第五定價金壹圓 送料六錢
第六定價金壹圓 送料六錢
第七定價金壹圓 送料六錢
第八定價金壹圓 送料六錢
第九定價金壹圓 送料六錢
第十定價金壹圓 送料六錢

琴調子曲

琴糸締機

價目
甲 壹圓
乙 壹圓
丙 壹圓
丁 壹圓
外 壹圓

(詳細なる説明書は郵送料を以て別紙あり)

發行所 福岡市外馬出二二三。 箏曲通信教授所



Handwritten text in various styles, including '琴糸締機' and '新譜箏曲の集'. The text is written in black ink on a light background.

序

吾邦家庭音楽として用ゆる樂器種々ありと雖ども、箏に及ぶものあらじ、方今一部人士に流行する洋樂は、邦樂に比し、優れる點種々ありと雖ども、其旋律の邦人の性情と一致せざる、其樂器の高價にして且つ吾家屋に適せざる、到底吾人と全化する事困難なるべし。茲に於て、現今吾家庭音楽の主要部分を占めける箏曲をして、彼れの短を去り長を採り、之を應用するは、目下の急務なるべし。

吾樂友井上胡蝶氏頃日箏曲音譜を著述せらる、本音譜を見るに通俗にして一般人士に理解し易きは蓋し之に及ぶものあらじ、勿論西洋音譜の如く完全なるものにはあらずるも、其完全ならざる處に特長あり何となれば近來二三出版されたる箏曲音譜は至難にして理

序

吾邦家庭音楽として用ゆる樂器、種々ありと雖も、等に及ぶものあらじ、方今一部人士に流行する洋樂は、邦樂に比し、優れる點種々ありと雖も、其旋律の邦人の性情と一致せざる、其樂器の高價にして且つ吾家屋に適せざる、到底吾人と全化する事困難なるべし。茲に於て、現今吾家庭音楽の主要部分を占めける箏曲をして、彼れの短を去り長を採り、之を應用するは、目下の急務なるべし。

吾樂友井上胡蝶氏頃日箏曲音譜を著述せらる、本音譜を見るに通俗にして一般人士に理解し易きは蓋し之に及ぶものあらじ、勿論西洋音譜の如く完全なるものにはあらざるも、其完全ならざる處に特長あり何となれば近來二三出版されたる箏曲音譜は至難にして理解し得る者極めて稀なるも、本音譜は直覺的にして何人にも理解し易ければなり。箏曲を學ぶ人々よ、運用の妙は一に其人に存す、大に此樂譜を利用して箏曲を研究せられなば益すること蓋し多大なるべし。

辛亥孟春

坂本湖月誌

凡 例

一本書は西樂の譜記法を基礎として作譜したれば其始めに樂典一部の初歩と箏曲専用の手法等を併せて記載する事とせり尙ほ箏曲固有の美質を失はざらんが爲め其歌詞等悉く在來の儘を記載せり思ふに旋律の如何と歌詞の善惡は人心特に幼者の思想に甚大なる反應を來すべき者なれば之が取捨に就ては充分の注意を望む者なり

一彈奏の手は各専門師匠に依りて之を異にし彼の組歌及段物と稱する者を除きては殆んど一定する處あらず然れども殊更に至難なる手を用ひて彈奏すべき必要を認めざれば本書は最も平易の手に依りて彈奏す可き曲譜を作れり

一本書の曲譜は從來専門師匠の彈奏しつゝある者と其拍數等に於て間々相違せる個處あり是れ樂典の原則に依りて多少改めたる處あればなり元來日本音樂には完全なる樂譜なき爲め時代と人物を異にするに從ひ各異なれる彈奏法を用ゆること多ければ今之が作譜をなすに當り往々前述の相違を生すべきこと固より數の止むを得ざる處なり

一本書の參考と成したるは大村恕三郎先生中尾都山先生黒田米太郎先生田島羽堂先生其他諸大家の作譜せられたる各「ヴァイオリン」樂符高松梅窓先生著箏曲道しるべ入江好次郎先生著樂典教科書田村虎藏先生著近世樂典教科書多梅椎先生著樂典入門加藤庸三先生著日本音樂沿革史森田五郎先生著三味線箏尺八調律法田崎翠峰先生著箏曲譜抄此他箏曲大意抄撫奏樂譜集等なりとす

一本書は西樂の譜記法を基礎として作譜したれば其始めに樂典一部の初歩と箏曲専用の手法等を併せて記載する事とせり尙ほ箏曲固有の美質を失はざらんが爲め其歌詞等悉く在來の儘を記載せり思ふに旋律の如何と歌詞の善惡は人心特に幼者の思想に甚大なる反應を來すべき者なれば之が取捨に就ては充分の注意を望む者なり

凡例

一本書は西樂の譜記法を基礎として作譜したれば其始めに樂典一部の初歩と箏曲専用の手法等を併せて記載する事とせり尙ほ箏曲固有の美質を失はざらんが爲め其歌詞等悉く在來の儘を記載せり思ふに旋律の如何と歌詞の善惡は人心特に幼者の思想に甚大なる反應を來すべき者なれば之が取捨に就ては充分の注意を望む者なり

一彈奏の手は各専門師匠に依りて之を異にし彼の組歌及段物と稱する者を除きては殆んど一定する處あらず然れども殊更に至難なる手を用ひて彈奏すべき必要を認めざれば本書は最も平易の手に依りて彈奏す可き曲譜を作れり

一本書の曲譜は從來専門師匠の彈奏しつゝある者と其拍數等に於て間々相違せる個處あり是れ樂典の原則に依りて多少改めたる處あればなり元來日本音樂には完全なる樂譜なき爲め時代と人物を異にするに従ひ各異なれる彈奏法を用ゆること多ければ今之が作譜をなすに當り往々前述の相違を生すべきこと固より數の止むを得ざる處なり

一本書の参考と成したるは大村恕三郎先生中尾都山先生黒田米太郎先生田島羽堂先生其他諸大家の作譜せられたる各「ヴァイオリン」樂符高松梅窓先生著箏曲道しるべ入江好次郎先生著樂典教科書田村虎藏先生著近世樂典教科書多梅椎先生著樂典入門加藤庸三先生著日本音樂沿革史森田五郎先生著三味線箏尺八調律法田崎翠峰先生著箏曲譜抄此他箏曲大意抄撫奏樂譜集等なりとす

一本書は歌曲の全部悉く言葉記號を附記したる事聊か蛇足の觀あるも樂譜を解せざる人も之に依りて彈奏する事を得られ且つ自然の間樂典の一般を理解せしめんと勉めたるなり一休止符の上部括弧内に言葉記號を記せるは三絃の言葉記號等にして箏と交互に彈奏する者にて俗に「ヒキワケ」と稱するものなり

一本書の編述に當り坂本五郎氏山本鎌太郎氏岸本高子女士等の懇篤なる援助を與へられ尙ほ辱知大江琴竹女士の國風を寄せられしを深く感謝す

目次

第壹編

- (一) 筑紫箏の由来
- (二) 箏曲流派の沿革
- (三) 箏の構造
- (四) 箏の絃
- (五) 箏の柱
- (六) 爪

第貳編

- (一) 音楽の解
- (二) 楽譜
- (三) 音の三性質
- (四) 高低記號
- (五) 長短記號
- (六) 音符
- (七) 休止符
- (八) 強弱記號
- (九) 雜記號
- (十) 運指法
- (十一) 右手法
- (十二) 左手法
- (十三) 彈奏の姿勢

第參編

歌詞及曲譜

- (一) 四季の花 一頁
- (二) 門松 二頁
- (三) 鶴の聲 四頁
- (四) 黒髪 六頁
- (五) 六段 九頁
- (六) 金剛石の曲 一四頁
- (七) 亂 一八頁
- (八) 八段 二五頁
- (九) 夕顔 三二頁
- (十) 新高砂の曲 三九頁
- (十一) 越後獅子 四四頁
- (十二) 千鳥の曲 五六頁
- (十三) 茶音頭 六四頁
- (十四) 春の曲 七四頁
- (十五) 小督の曲 八九頁

訂改 生田流箏曲新譜 卷一

井上胡蝶編

第壹編

(一) 筑紫箏の由来

箏の起原を探究ぬれば、遠く漢土の古代に創まれるものにて、唐の伏羲氏は貳拾絃の箏を作
り、黃帝之を改めて貳拾五絃の箏と成し、蒙恬之を破りて拾三絃の箏と成すと稱へて有ます
又箏曲大意抄にも「箏は固と貳拾五絃なりしを、半ばに分ちて拾參絃とす、拾貳ヶ月に閏月
を加ふる心ならんと記すより考ふるも、現今用られて居る筑紫箏は、最初蒙恬と云ふ人が作
りたる拾三絃の箏より創りたるものと思はれます、而して我國に箏の渡來せしは何年前と
云ふことは確かに明了ならざれども、仁明帝の時遣唐大使藤原貞敏箏を學びて歸朝すと謂
ふ事が、歴史に記るされるを見ても多分此の時代に輸入したるものかと思はれます、其後大
凡三百年を経て、宇多天皇の御代に、石川色子と謂ふ命婦、筑紫に下り豊前國彦山に於て、
箏の曲を異朝の人より學び、之を天皇に授け奉りたとも云ひ傳ふ斯くの如く筑紫箏は、其
始め筑紫に於て彈き初めたるより、筑紫箏の名ありと稱へます、

(二) 箏曲流派の沿革

箏曲の流派も、其初めは如何なる曲を彈じて居たかは、詳かに知り難きも、治承年中に或る

第貳編

- (一) 音樂の解
- (二) 樂譜
- (三) 音の三性質
 - (5) 高低記號
 - (3) 長短記號
- (甲) 音符
- (乙) 休止符
- (ハ) 強弱記號
- (ニ) 雜記號
- (四) 運指法
 - (甲) 右手法
 - (乙) 左手法
- (五) 彈奏の姿勢

(四) 樂

- (五) 六 段 六頁
- (六) 金剛石の曲 九頁
- (七) 亂 一四頁
- (八) 八 段 一八頁
- (九) 夕 顏 二五頁
- (十) 新高砂の曲 三二頁
- (十一) 越後獅子 三九頁
- (十二) 千鳥の曲 四四頁
- (十三) 茶 音 頭 五六頁
- (十四) 春 の 曲 六四頁
- (十五) 小督の曲 七四頁
- 八九頁

訂改 生田流箏曲新譜 卷一

井上胡蝶編

第壹編

(一) 筑紫箏の由來

箏の起原を探究すれば、遠く漢土の古代に創まれるものにて、唐の伏羲氏は貳拾絃の琴を作り、黃帝之を改めて貳拾五絃の琴と成し、蒙恬之を破りて拾三絃の琴と成すと稱へて有ます。又箏山大意抄にも「箏は固と貳拾五絃なりしを、半ばに分ちて拾參絃とす、拾貳ヶ月に閏月を加ふる心ならんと記すより考ふるも、現今用られて居る筑紫箏は、最初蒙恬と云ふ人が作りたる拾三絃の琴より創りたるものと思はれます、而して我國に箏の渡來せしは何年前と云ふことは確かに明了ならざれども、仁明帝の時遣唐大使藤原真敏箏を學びて歸朝すと謂ふ事が、歴史に記されるを見ても多分此の時代に輸入したるものかと思はれます、其後大凡三百年を経て、宇多天皇の御代に、石川色子と謂ふ命婦、筑紫に下り豊前國彦山に於て、箏の曲を異朝の人より學び、之を天皇に授け奉りたとも云ひ傳ふ斯くの如く筑紫箏は、其始め筑紫に於て彈き初めたるより、筑紫箏の名ありと稱へます、

(二) 箏曲流派の沿革

箏曲の流派も、其初めは如何なる曲を彈じて居たかは、詳かに知り難きも、治承年中に或る公卿か、筑紫に左遷されて其徒然を慰むる爲め、民間に傳はりて居たる箏の曲を翫ひ且つ自身にも歌曲を作りて之と彈じたるを、筑紫流の初めとも稱へます、時に筑後國善導寺に、聖光と云ふ高僧あり、某公卿より箏曲を學び彈奏に妙を得代々其寺に傳へましたので、全地を箏曲の開源地と謂ひ傳へ、今は全僧を筑紫流の祖先と仰ぎます、

善導寺は福岡縣筑後國三井郡善導寺村に在り、今を去る七百三拾年前、同寺に聖光と云へる高僧あり、百般の音樂に長じ殊に箏曲は、其最も好み玉ふ處なり、文政十年十一月二十一日、仁孝天皇より大紹正宗國師の號を給ひ、以來鎮西本山善導寺開山大紹正宗國師と尊

稱す、嘉禎四年閏二月二十九日入滅あり、現在の御貫主は其五十九代目に相當せらる、斯く聖光上人は、宗教上の偉人なると同時に箏曲の祖先なれば、上人入滅以來、同寺に於ては大法要毎に、箏曲を用ひたりしも今は全く中絶せり殊に故上人彈奏の曲譜は勿論、之に關する遺書等も無ければ、調査すべき方法も無し、上人の實家は筑前國香月にして、今に其系統は連續し、上人幼少の時に着け玉ひし振袖等は殘存れるも、箏曲に關しては又全く遺書等の據るべきもの無く、甚だ惜むべきの極なりとす、

現代御貫主又明德なり故聖光上人の遺志を鑑み、之が再興に就きて種々考慮有り傳承す

其後大永天文の頃に、賢順と云へる僧、善導寺に在りて箏曲を學び彈奏に妙を得たれば、筑紫流中興の祖と仰がれました、當時肥前國慶岩寺の僧玄恕、又は善導寺の僧法水など云へる人は、此の賢順より箏曲を學びたる者で有ます、

其頃武藏國に山住勾當と云へる三味線の名人あり、或時筑紫に下り玄恕に従ひて箏曲を學び筑紫流の奥儀を究めました、勾當思ふに、筑紫流は其調へ余り高尚にして一般の人には解し難ければ、之を改めて汎く世間に流布させんものと、自ら組歌前後十五を作り、箏曲の手に載せて彈奏せしもの豫期の如く世人の嗜好に適ひ大に流行する様に成ました、山住勾當は、其後檢校となり八橋と改め、其流名も八橋流と稱へます、

其後寛永年間に生田檢校と云へる人有り、是又箏曲の名人にて、自ら一派を開て生田流と稱へ、盛に時世を風靡かせました、

是より後、寛政年中に山田檢校と云ふ人有り、是も箏曲の名人にて山田流と云ふを創め、又盛に流行致しました、要之、山田流は生田流より出で、生田流は八橋流より出で、八橋流は筑紫流より出でたる流派で有ます、而して現今最も流行するは、生田流山田流の貳つで有ます

(三) 箏の構造

箏は桐の厚き板を彫り、底に薄き桐板を張りて造る、(杉其他の木材にて造れる物有るも其音響桐製の物に及ばず)其長さ六尺四寸、巾は首にて八寸二分五厘、尾にて七寸八分八厘、柱の高は三寸と法式となすと云へるも、現今にては本間と稱するものにて長六尺あり、間詰と

稱するものにて五尺より五尺八寸迄の物有り、外に「あやめ形」と稱へて四尺のものもあり、柱は多く一寸七八分の高さに造りて有る、箏の余り短かき物は其音響の悪しきのみでなく、三絃尺八「ヴァイオリン」などと合奏の場合に、調子を合せるに困難の事が有ます、併し五尺八寸以上の物なれば先づ差支へは有りません、

風俗通に、琴の上圓さは天に象どり、下の平らかなるは地に象どり、中の空虚なるは六合に準し、絃の拾貳は拾貳ヶ月に配し、一の絃を加へて閏月に擬し、柱の高は三寸は天地人に象り、長さ六尺は律數に應ずと、記載してあります、

(い) 箏の絃

箏の緒即ち絃は、其數拾參筋の者にて、其大さは何れも同一のものなり只其架け方と柱の据へ處で一々音の異なる者で有ます、箏の絃を架くるは、琴の龍角と雲角との外側にある、拾三の小孔を通して、各一筋宛を架けるので、何れも同じ位の強さに張るもので有ます、最も四六九十斗の五つの絃は他の絃に比して、少し斗り強く張りて置けば、調子を合せるに都合善き者であります、

箏の絃の名稱は、自身の座したる向ふより、手前の方に向つて、一二三四五六七八九十斗爲巾と稱して數へるものなり、

絃の名稱は、昔は、仁、智、禮、義、信、文、武、斐、蘭、商、斗、爲、巾と稱へしも、或時代より、一二三四に改め、現今は只斗爲巾の三字のみ残りりと(森田吾郎氏著三味線箏尺八調律法

る人は、此の賢順より箏曲を學びたる者で有ます、

其頃武藏國に山住勾當と云へる三味線の名人あり、或時筑紫に下り玄想に従ひて箏曲を學び筑紫流の奥儀を究めました、勾當思ふに、筑紫流は其調へ余り高尚にして一般の人には解し難ければ、之を改めて汎く世間に流布させんものと、自ら組歌前後十五を作り、箏曲の手に載せて彈奏せしもの豫期の如く世人の嗜好に適ひ大に流行する様に成ました、山住勾當は、其後檢校となり八橋と改め、其流名も八橋流と稱へます。

其後寛永年間に生田檢校と云へる人有り、是又箏曲の名人にて、自ら一派を開て生田流と稱へ、盛に時世を風靡かせました、

是より後、寛政年中に山田檢校と云ふ人有り、是も箏曲の名人にて山田流と云ふを創り、又盛に流行致しました、要之、山田流は生田流より出で、生田流は八橋流より出で、八橋流は筑紫流より出でたる流派で有ます、而して現今最も流行するは、生田流山田流の貳つで有ます

(二) 箏の構造

箏は桐の厚き板を彫り、底に薄き桐板を張りて造る、(杉其他の木材にて造れる物有るも其音響桐製の物に及ばず)其長さ六尺四寸、巾は首にて八寸二分五厘、尾にて七寸八分八厘、柱の高は三寸五分法式となすと云へるも、現今にては本間と稱するものにて長六尺あり、間詰と

稱するものにて五尺より五尺八寸迄の物有り、外に「あやめ形」と稱へて四尺のものもあり、柱は多く一寸七八分の高さに造りて有る、箏の余り短かき物は其音響の悪しきのみでなく、三絃尺八「ヴァイオリン」などと合奏の場合に、調子を合せるに困難の事が有ます、併し五尺八寸以上の物なれば先づ差支へは有りません、

風俗通に、琴の上圓きは天に象どり、下の平らかなるは地に象どり、中の空虚なるは六合に準し、絃の拾貳は拾貳ヶ月に配し、一の絃を加へて閏月に擬し、柱の高は三寸は天地人に象り、長さ六尺は律數に應ずと、記載して有ります、

(い) 箏の絃

箏の緒即ち絃は、其數拾參筋の者にて、其大さは何れも同一のものなり只其架け方と柱の据へ處で一々音の異なる者で有ます、箏の絃を架くるは、琴の龍角と雲角との外側にある、拾三の小孔を通して、各一筋宛を架けるので、何れも同じ位の強さに張るもので有ます、最も四六九十斗の五つの絃は他の絃に比して、少し斗り強く張りて置けば、調子を合せるに都合善き者で有ります、

箏の絃の名稱は、自身の座したる向ふより、手前の方に向つて、一二三四五六七八九十斗爲巾と稱して數へるものなり、

絃の名稱は、昔は、仁、智、禮、義、信、文、武、斐、爾、商、斗、爲、巾と稱へしも、或時代より、一二三四に改め、現今は只斗爲巾の三字のみ残りりと(森田吾郎氏著三味線箏尺八調律法参照)

(ろ) 琴柱

柱は全体を象牙にて造れる者われど、多くは木にて造り、其頂上に口角と稱ふる象牙、又は他の角類が填めて有ますが、其口角の上部の凹字形ある處に、絃を架するもので有ます、此の琴柱を、龍角の方に近づくるに従ひて、段々其音は高くなり、雲角の方に寄するに伴れて、其絃音は段々低くなる故に調子を合せるには、常に此琴柱を上下して、都合よく調律する者で有ります、

(は) 爪

爪は象牙又は他の角類にて造り、其一方の端を爪袋と稱する皮、又は布にて造りたる小さき輪にはめて之を糊着し、右手の拇指中指示指の三指にはめて箏を弾する者で有ます、爪の形は、山田流のものは隋圓形にして先きの尖りたるを用ひ、生田流は稍長方形の者を用ひます

第二編

(一) 音樂の解

事物の道理を辨まへぬ三歳の童兒より、音樂とは如何なる者なるやを知らぬ人にて、奏樂の面白き曲節を聞くときは、何となく精神に愉快を感ずるもので有ます、是れ人は生れながらにして、或る程度までは、音の快不快を聞き分くる天性を有する証據で有ます、故に音樂とは人々が自然に備へて居る嗜好心に向つて、外界より適合させる處の音響であること云ふ事が出来、簡短に言ふ時は「人々が聞きて愉快を感ずる連續せる音響である」とも云ふ事が出来、

音樂には種々の類が存在すれども、之を大別して聲樂と器樂の二つに分ちて有ます、學校に用ふる唱歌より、淨瑠璃長唄等は何れも聲樂に屬し、之に伴ふ三味線「オルガン」などは、凡て器樂に屬する者であります、此書に記載する、琴の歌は聲樂に屬し、琴の手は器樂であります、此書に於ては、其器樂に屬する彈奏法を主として詳説し、聲樂の方を客として記載することに致します

(二) 樂譜

音樂は其聲樂と器樂とを問はず、凡て音響に屬すれば、之を視る事の出来る様に書顯はす者を樂譜と稱へます、樂譜には本譜と略譜の二つが有て、此書の樂譜は歐洲略譜の体に記載すれ共、其音名等は同一で有りませぬ、此書には琴の絃の名、即ち一二三四五六七八九十斗爲巾の拾三字を用ひて、其儘音名と致しました、是れは琴を彈奏する上に於て、最も便利なる法で、且つ又歐洲樂譜に熟達せざる人々に、分り易き爲を考たのであります、然れども歐洲樂譜に精通せる人は、此書に記載せる調子の對照表を見て歐洲樂譜に書き換ゆる事が出来る者であります、而して此書の樂譜は歐洲樂譜の如く、凡て左方より右方に向つて進行するものにて、上部に記載せるは日本在來の言葉記号で、又其上部に歌詞を記したのであります

す、歌詞なくして彈奏のみを綴ぐる場合、所謂手事の初には、合又は手事を記してあります

(三) 音の三性質

音には總て、高低、長短、強弱の三つの性質を備へて居る者で、之を音の三性質と稱へます、
第一高低 とは其音の高し低しを謂ふ者にて、之を調子又は律と稱へます、
第二長短 とは其音の響く時間の長し短を謂ふものにて、之を拍子又は間と稱へます、
第三強弱 とは其響きの強し弱しを謂ふ者にて、之を音量とも稱へます、
以上三つの性質を都合よく應用するのが箏曲の肝要であります、

(い) 高低記號(調子)

歐洲略譜にては、音の高低を書き顯はすに、亞刺比亞數字を用ひますが、日本にては雅樂律名と稱し、歐洲音名と同様のものが有ます、即ち壹越、斷金、平調、勝絶、下無、双調、鳧鐘、黃鐘、懸鏡、盤涉、神仙、上無、の拾貳で、之を歐洲音名(日本にて稱案せし)と對比せる時は、左の通りと成るものとす、

歐洲音名	・ハ	ロ	キイ	イ	キト	ト	キへ	へ	ホ	キニ	ニ	キハ	ハ
------	----	---	----	---	----	---	----	---	---	----	---	----	---

ふ事が出来ず、簡短に言ふ時は「人々が聞きて愉快を感じる連続せる音響である」とも云ふ事が出来ず、

音楽には種々の類が存在すれども、之を大別して聲樂と器樂の二つに分ちて有ります、學校に用ふる唱歌より、淨瑠璃長唄等は何れも聲樂に屬し、之に伴ふ三味線「オールガン」などは、凡て器樂に屬する者であります、此書に記載する、琴の歌は聲樂に屬し、琴の手は器樂であります、此書に於ては、其器樂に屬する彈奏法を主として詳説し、聲樂の方を客として記載することに致します

(二) 樂譜

音楽は其聲樂と器樂とを問はず、凡て音響に屬すれば、之を視る事の出来る様に書顯はす者を樂譜と稱へます、樂譜には本譜と略譜の二つが有て、此書の樂譜は歐洲略譜の体に記載すれ共、其音名等は同一で有りません、此書には琴の絃の名、即ち一二三四五六七八九十斗爲巾の拾三字を用ひて、其儘音名と致しました、是れは琴を彈奏する上に於て、最も便利なる法で、且つ又歐洲樂譜に熟達せざる人々に、分り易き爲を考たのであります、然れども歐洲樂譜に精通せる人は、此書に記載せる調子の對照表を見て歐洲樂譜に書き換ゆる事が出来る者であります、而して此書の樂譜は歐洲樂譜の如く、凡て左方より右方に向つて進行するものにて、上部に記載せるは日本在來の言葉記号で、又其上部に歌詞を記したのであります

(三) 音の三性質

音には總て、高低、長短、強弱の三つの性質を備へて居る者で、之を音の三性質と稱へます、
 第一高低 とは其音の高し低しを謂ふ者にて、之を調子又は律と稱へます、
 第二長短 とは其音の響く時間の長し短を謂ふものにて、之を拍子又は間と稱へます、
 第三強弱 とは其響きの強し弱しを謂ふ者にて、之を音量とも稱へます、
 以上三つの性質を都合よく應用するのが箏曲の肝要であります、

(い) 高低記號(調子)

歐洲略譜にては、音の高低を書き顯はすに、亞刺比亞數字を用ひますが、日本にても雅樂律名と稱し、歐洲音名と同様のものが有ります、即ち壹越、斷金、平調、勝絶、下無、双調、鼻鐘、黄鐘、懸鏡、盤涉、神仙、上無、の拾貳で、之を歐洲音名(日本にて稱案せし)と對比せる時は、左の通りと成るものとす、

歐洲音名	・ハ	ロ	キイ	イ	キト	ト	キへ	へ	ホ	キニ	ニ	キハ	ハ
雅樂律名	・神仙	盤涉	懸鏡	黄鐘	鼻鐘	双調	下無	勝絶	平調	斷金	一越	上無	神仙

然るに右に記せる日本雅樂の「一越」とか、歐洲音名の「ハ」とかは、果して如何程の音程に相當するものか、實地に就いて聴知るには、雅樂律名は調子笛に依り、歐洲音名は「オールガン」に依りて之を知ることが、出来ず、即ち調子笛には其管口の外側に、一越より上無迄拾貳律音名の頭文字を記しありて、其管の口を吸ふ時は一々異なりたる音を發するを以て、是れを其外側に記せる音名に相當する音聲と心得ふれば宜しいので有ります、又歐洲音名は「オールガン」の其音名に相當する鍵盤を押せば、一々其音名に相當する音聲を發する故に、之に依りて其音程を聴覺へる事が出来ず、

(ア) 箏の調律法及調子の種類

箏の調子を合せるには、前に述べたる「オルガン」又は調子笛に依りて、調律する事が出来、其方法は他の樂器の内の或る音と、箏の絃の或るものと、一々其音を同ト高さの音となす者であります。

箏は歌曲の異なるにつれて、之を弾すべき調子にも種々の類が有る者で、往古は雅樂の調子を用いて居たるを、彼の八橋檢校之を改めて平調子を作り、其後種々の調子が出来、近世にては吉澤檢校(尾張國名古屋の人にして嘉永より明治初年に亘る)古今調子を作りまし、現今新曲の流行につれ調子にも種々雑多の者がありますが、普く人の知れるものを舉ぐれば左の通りであります。

平調子 半雲井調子 雲井調子 中空調子 (六上ゲトモ稱ス) 岩戸調子 古今調子
右の内平調子が、凡ての調子の基礎となる者にて、之を好く了解すれば、其他の調子は最も安く調律する事が出来る者であります。

(イ) 「オルガン」にて平調子合せ方

「オルガン」の鍵盤の「ニ」に當る處を押して發する音と、箏の第貳絃の音とを、同じ高さの音となる様に琴柱を据へ、斯の如く漸々「オルガン」の「ホ」を第三絃に、「ヘ」を第四絃に、「イ」を第五絃及び第一絃に、「ロ」を第六絃に、「ニ」を第七絃に、「ホ」を第八絃に、「ヘ」を第九絃に、「イ」を第十絃に、「ロ」を斗の絃に、「ニ」を爲の絃に、「ホ」を巾の絃に合せるのであります。

(ウ) 調子笛にて平調子合せ方 (八橋の調子笛)

調子笛の壹の字を記したる管の口を吸ひて發する音と、絃の第二絃とを同音となし、斯の如く漸々に平を第三絃に、勝を第四絃、黄を第一絃と第五絃に、鸞を第六絃に合すべし、而して第七絃は第二絃の裏、即ち上層の一越となし(第二絃を中指にて第七絃を拇指にて同時に彈ト二絃共に同律の音即ち和聲となすものであります)第八絃は第三絃の裏の平に、第九絃は第四絃の裏の勝に、第十絃は第五絃の裏の黄に、斗の絃は第六絃の裏の鸞に、爲の絃は第七絃の裏の壹(上々層)に、巾の絃は第八絃の裏の平(上々層)に、順次合せるのであります。

(エ) 半雲井調子合せ方

平調子の第八絃を半音下げて調子笛の斷金、又は「オルガン」の「ニ」となし、第九絃を半音上げて調子笛の双調、「オルガン」の「ト」に合せるのであります。

(オ) 雲井調子合せ方

半雲井調子の第三絃を半音下げて調子笛の斷金、「オルガン」の「ロ」と合せ、第四絃を半音上げて、調子笛の双調、「オルガン」の「ト」に合せ巾の絃を半音下げて「オルガン」の「ニ」調子笛の斷金に合せるものであります(山田流の雲井調子は巾の絃は下げず平調子の儘とす)

(カ) 中空調子の合せ方

平調子の第六絃を半音上げて、調子笛の盤渉、「オルガン」の「ロ」と合せ、第七絃を一音下げて、調子笛の神仙、「オルガン」の「ハ」と合せ、斗の絃を半音上げて、調子笛の盤渉(第六絃)の裏「オルガン」の「ロ」と合せ、爲の絃を一音下げて、調子笛の神仙(第七絃)の裏「オルガン」の「ハ」と合せるのであります。

(キ) 岩戸調子合せ方

中空調子の第四絃を半音上げて調子笛の下無「オルガン」の「ハ」と合せ、第五絃を一音下げて調子笛の双調、「オルガン」の「ト」に合せ、第九絃を半音上げて調子笛の下無、(第九

絃の裏「オルガン」の「ハ」と合せるのであります(調子笛の双調(第五絃の裏)「オ

最も安く調律する事が出来る者であります。

(イ) 「オルガン」にて平調子合せ方

「オルガン」の鍵盤の「ニ」に當る處を押して發する音と、箏の第貳絃の音とを、同じ高さの音となる様に琴柱を据へ、斯の如く漸々「オルガン」の「ホ」を第三絃に、「ハ」を第四絃に、「イ」を第五絃及び第一絃に、「ロ」を第六絃に、「ニ」を第七絃に、「ホ」を第八絃に、「ヘ」を第九絃に、「イ」を第十絃に、「ロ」を斗の絃に、「ニ」を爲の絃に、「ホ」を巾の絃に合せないのであります。

(ウ) 調子笛にて平調子合せ方（八橋の調子笛）

調子笛の壹の字を記したる管の口を吸ひて發する音と、絃の第二絃とを同音となし、斯の如く漸々に平を第三絃に、勝を第四絃、黄を第一絃と第五絃に、鸞を第六絃に合すべし、而して第七絃は第二絃の裏、即ち上層の一越となし、第二絃を中指にて第七絃を拇指にて同時に彈ト二絃共に同律の音即ち和聲となすものであります（第八絃は第三絃の裏の平に、第九絃は第四絃の裏の勝に、第十絃は第五絃の裏の黄に、斗の絃は第六絃の裏の鸞に、爲の絃は第七絃の裏の壹（上々層）に、巾の絃は第八絃の裏の平（上々層）に、順次合せるのであります。

(エ) 半雲井調子合せ方

平調子の第八絃を半音下げて調子笛の斷金、又は「オルガン」の「ロ」となし、第九絃を一音上げて調子笛の双調、「オルガン」の「ト」に合せるのであります。

(オ) 雲井調子合せ方

半雲井調子の第三絃を半音下げて調子笛の斷金、「オルガン」の「ロ」と合せ、第四絃を一音上げて、調子笛の双調、「オルガン」の「ト」に合せ巾の絃を半音下げて「オルガン」の「ロ」調子笛の斷金に合せるのであります（山田流の雲井調子は巾の絃は下げず平調子の儘とす）

(カ) 中空調子の合せ方

平調子の第六絃を半音上げて、調子笛の盤涉、「オルガン」の「ロ」と合せ、第七絃を一音下げて、調子笛の神仙、「オルガン」の「ハ」と合せ、斗の絃を半音上げて、調子笛の盤涉（第六絃）の裏「オルガン」の「ロ」と合せ、爲の絃を一音下げて、調子笛の神仙（第七絃の裏）「オルガン」の「ハ」と合せるのであります。

(キ) 岩戸調子合せ方

中空調子の第四絃を半音上げて調子笛の下無、「オルガン」の「ロ」と合せ、第五絃を一音下げて調子笛の双調、「オルガン」の「ト」に合せ、第九絃を半音上げて調子笛の下無、（第九絃の裏）「オルガン」の「ハ」と合せ、第十絃を一音下げて調子笛の双調（第五絃の裏）「オルガン」の「ハ」と合せるのであります。

(ク) 古今調子の合せ方

平調子の第貳絃を其裏、即ち上層音の第七絃まで上げて同音となし、次に第四絃を一音上げて調子笛の双調、「オルガン」の「ト」に合せ、第九絃を一音上げて第四絃の裏の双調、「オルガン」の「ト」に合せたるものであります。

(ケ) 他の諸調子

以上諸調子の外、現今流行する、新曲の調子は、前述の方法にて、其歌曲の初めに記るし、前に述べたる諸調子にて彈奏すべき者は、只調子の名のみを記す事に致します、尙ほ歌曲の中途にて調子を變更すべきものは、曲譜の上部に、「以下何調子或は何の絃何音上下」等と記す

表 照

調古	調岩	調中	調清
子今	子戸	子空	子井
巾	巾	巾	巾
爲			
	爲斗	爲斗	
斗十		十	十
九	十九		九
	八	九八	
八		八	八七
七二			
	七六	七六	
六			六
五一		五一	五一
四	五四		四
	三	四三	
三			三二
	二		

(ろ) 長短記號

(甲) 音符

音の長短を書顯はす記號を音符と稱へます、此書には箏の絃名即ち、壹より拾までの數字と斗爲巾の三字に此の記號を附け加へて、何の絃は長く、何の絃は短かく彈すると云ふ事を示します、此の音符には左の八種が有ます、

全音符 貳分音符 四分音符 八分音符 拾六分音符 三拾貳分音符 附点音符・再附点音符

(ア) 全音符 (000)

通常手を四つ拍の間を保つべき長さの音にして、一拍手の間を大凡一秒時間とするものなれば、四秒時間に涉る長さの音であります、而して琴の拾の絃が全音なる時には十の如く記

載し、凡て絃名の字の右側に、○三個を附加へて之を示します、

(イ) 貳分音符 (〇)

全音符の半分即ち貳拍手の間を保つべき長さの音であります、琴の五の絃が貳分音なる時には五の如く、凡て絃名の字の右側に、〇一個を加へて之を示します、

(ウ) 四分音符

貳分音符の半分、即ち一拍手の長さの音にして、此四分音の時には、凡て琴の絃名の字のみを記して、別に何の記号をも用ひません、

(エ) 八分音符 (一)

四分音符の半分、即ち一つ手を拍つ間に、或る絃を貳度彈すべき早さの音であります、今琴の壹の絃が八分音で有る時は壹の如く、凡て琴の絃名の字の下に、一を附けて之を示します、

(オ) 拾六分音符 (二)

八分音符の半分、即ち一拍手の間に四度彈すべき早さの音であります、今琴の貳の絃が拾六分音で有る時は貳の如く、凡て絃名の字の下に二を附けて之を示します、

(カ) 三拾貳分音符 (三)

拾六分音符の半分、即ち一拍手の間に八度彈すべき早さの音にして、琴の三の絃が三拾二分音なれば參の如く、凡て絃名の字の下部に三を附けて之を示します、

(キ) 附点音符 (・)

以上六種の音符の何れかに附け加へて、其功用を顯はすものにて、此の附点音符を附けたる音符は、其固有の音長の半分丈け更に延長すべき者であります、故に全音符に之を附記すれば、全音と全音の半分即ち貳分音とを合計したる音長となり、四分音符に附記すれば四分音と四分音の半分即ち八分音とを合計したる音長となるものであります、附点音符の記載法は凡て、絃名の字の右側に、・を附けて之を示します、即ち十等の如し、

(ク) 再附点音符 (〃)

附點音符に更に又一點を附け加へたるものにして、附點音の外更に、附點音符の半分丈け余分に其音を延長すべきものであります、故に全音符に再附點音符を附記すれば、全音符と貳分音符と四分音符とを合計したる音長となるものであります、此記入方法は凡て絃名の字の右側に $\bullet\bullet$ を附記して之を示します、即ち $\bullet\bullet$ 等の如し、
樂譜中 四 又は 五 等の如く記せるは、 五四十九 の連続したるものにて、其意義に異なる處はありません、

(乙) 休止符

樂曲彈奏の中、或る場所に於て、奏樂を休むべき事がありまして、此休むべき時間の長短を顯はす者を休止符と稱へます、日本在來の音樂にては、「ソレ」「ヨイ」などの言葉を用ひて之を表はして居ましたが、是れは甚だ不完全にして、其長短を詳かに知る事は出来ません、故に斯に記せる休止符は、音符と同トく精細に了解すべき必要があります、
休止符の記載法は凡て音符の間に挿入して之を記す者であります、

休止符は音符と同トく其種類も左の八種ありて、休止の時間も各音符と全時間休止すべき者であります、

全休止符 貳分休止符 四分休止符 八分休止符 拾六分休止符 卅貳分休止符 附點休止符 再附點休止符

(ア) 全休止符 (〰)

四拍手即ち大凡四秒時間に渉る長さの間、休止すべきものであります、

(イ) 貳分休止符 (〃)

全休止符の貳分の一、即ち貳拍手の間休止すべき者であります、

(ウ) 四分休止符 (〸)

一拍手の間休止すべきもので、俗に「ソレ」と云ふ休止に相當する者であります、

(エ) 八分休止符 (ノ)

四分休止符の貳分の一、即ち半拍手の間休止すべき者にて、俗に「ヨイ」と云ふ休止に相當する者であります、

る者であります、

(オ) 拾六分休止符 (ヰ)

八分休止符の貳分の一の間休止すべきものにて、俗に「ッ」と云へる短かさ休止であります、

(カ) 三拾貳分休止符 (ヱ)

拾六分休止符の貳分の一の間休止すべきものにて、最も短かさ休止であります、

(キ) 附點休止符 (・)

以上六種の休止符の何れかに附記して其効力を顯はす者にて、附點音符の例と全く之を附したる休止符は、何れも其固有の休止符の貳分の一丈け、更に長く休止すべき者であります、

(ク) 再附點休止符 (〰)

附點休止符に更に一點を加へたるものにて、之を附したる休止符は、其固有の休止符より更に七割五分の間、休止すべき者であります(再附點音符の例に全ト)


右八種の休止符は、此樂譜に於ては、器樂即ち彈奏上のみ用ひ、聲樂即ち箏歌の方には用ひませぬ、箏歌の方には、歌詞の文字の次に横線を用ひ、或絃より或絃までを彈する間

此線を引延べて歌ふべき者であることを顯はしてあります又休止符の上部に歌詞あるは、凡


ん、故に斯に記せる休止符は、音符と同トク精細に了解すべき必要がありません、
休止符の記載法は凡て音符の間に挿入して之を記す者であります、

休止符は音符と同トク其種類も左の八種ありて、休止の時間も各音符と全時間休止すべき者であります、

全体止符 二分休止符 四分休止符 八分休止符 拾六分休止符 卅二分休止符 附点
休止符 再附点休止符

(ア) 全体止符 


四拍手即ち大凡四秒時間に渉る長さの間、休止すべきものであります、

(イ) 二分休止符 

全体止符の二分の一、即ち四拍手の間休止すべき者であります、

(ウ) 四分休止符 

一拍手の間休止すべきもので、俗に「ソレ」云ふ休止に相當する者であります、

(エ) 八分休止符 

四分休止符の二分の一、即ち半拍手の間休止すべき者にて、俗に「ヨイ」と云ふ休止に相當す


る者であります、

(オ) 拾六分休止符 


八分休止符の二分の一の間休止すべきもので、俗に「ハッ」と云へる短かさ休止であります、

(カ) 三拾二分休止符 

拾六分休止符の二分の一の間休止すべきもので、最も短かさ休止であります、

(キ) 附点休止符 

以上六種の休止符の何れかに附記して其効力を顯はす者にて、附点音符の例と全トク之を附したる休止符は、何れも其固有の休止符の二分の一丈け、更に長く休止すべき者であります、

(ク) 再附点休止符 

附点休止符に更に一點を加へたるものにて、之を附したる休止符は、其固有の休止符より更に七割五分の間、休止すべき者であります(再附点音符の例に全ト)

右八種の休止符は、此樂譜に於ては、器樂即ち彈奏上のみ用ひ、聲樂即ち箏歌の方には用ひませぬ、箏歌の方には、歌詞の文字の次に横線を用ひ、或絃より或絃までを彈する間其聲を引延べて歌ふべき者たることを顯はしてあります又休止符の上部に歌詞あるは、凡て其記載する休止の時間と同長さに、歌詞の文字を歌べき者であります、

(ハ) 強弱記號

音の強弱を表はすには、曲譜と何れも均一なる拍子數の小部分に區劃して、其小區分中の第何位目にある音符は強聲にして、第何位目にある音符は弱聲なりと云ふ事を示します、小節は單縦線を以て、曲譜の上部より下部まで貫きたる者にて、此一小節の中にある音符は、何れの小節に於ても、之れを合計すれば全一の拍數となるものであります、最も音符の種類は一定する必用なくして、休止符は拍數の内に加へる者であります、右各小節の中に、強聲と弱聲に當る音符を明示する者を拍子と云ひます、此拍子にも種々あれども、箏曲に用ゆるものは、重に四拍子なれば、之に就きて左に説明することに致し

ます、

四拍子に四分の四拍子と八分の四拍子の貳種があります、

(ア) 四分の四拍子

四分の四拍子には、一小節中に四分音符四個、若くは合計して四分音符四個に相當する拍數の音符があります、

(イ) 八分の四拍子

八分の四拍子には、一小節中に八分音符四個、又は合計上八分音符四個に相當する拍數の音符があります、

右四分の四拍子及び八分の四拍子に於ては、第一位にある音符は強聲にして、第三位にある音符は中強の者であります、又第貳位第四位の音符は何れも弱聲であります、

斯の如く一小節中の音符、皆同一の拍數で有て、規則正しく強聲に始まり弱聲に終る者を正格小節と云ひ、樂曲最終の小節中の一部分を割きて、樂曲の始めに移したるもの、即ち弱聲に始まり強聲に終る者を、變格小節と名つけますが、箏曲には之を用いたる處至て少き者であります、

(ハ) 雜記号

以上説き來れる音の高低長短強弱に關する諸記號の外之に關して特別の記號あり、特に箏曲に於ては之を能く心得べき必要がであります、

(ア) 延長記號 (・)

或る音符又は休止符を、其一定の長さの貳分の一以上、貳倍迄を、隨意に延長することを得る記號にして、樂曲の終りに用いること多し、假令へは箏と三絃との合奏等の時に最終の音は、双方氣息を相圖りて、最も緩漫に合奏し終るが如き場合に用います、

(イ) 速度記号

樂曲進行の速度を示す記號にして或る樂曲の一部分を、特に長く或は短かく、彈奏すべき記號で有て、樂譜の上部に左の通りに記して之を示します、

最モ緩ニ 緩徐ニ 漸々早ク 急速ニ 漸々緩徐ニ

(ウ) 特別強弱記號

樂曲中の或る音符を、特に強く或は弱く、彈奏すべき記號にして、強聲の時には音符の上部に(∧)を附し、弱聲の時には(∨)を附して之を示します、此弱聲の彈奏法は、俗に横爪と稱して、多く拇指の爪角にて特に弱く彈奏するものであります、

(エ) 濁音法 (タ)

樂曲中成る音符を濁音となすものにて、其彈奏法は、左手示指の指頭と、其彈すべき絃に當れる琴柱より右側の絃下に挿入し示指の爪の上面を少しく絃に觸れつゝ右手にて彈奏すべき者で有て其記号は音符の右側に「タ」の字を附して之を表はします、

(オ) 段落及終止記号

樂曲の段落を示すにはIを用い終結を示すにはIIIを用ひます、

(四) 運指法

奏樂上最も巧妙なる熟練を要し、一の技術に屬すべき者であります、箏曲大意抄には、右手拾七法左手八法と定めありて、此内には重復に渉るもの、又は變更記號に屬すべき者なき有りて、規則整然たらざるも、箏曲を學ぶ人は、此手法の名稱を用ゆる人多ければ、此

る音符は中強の者であります。又第貳位第四位の音符は何れも弱聲であります。斯の如く一小節中の音符、皆同一の拍數で有て、規則正しく強聲に始まり弱聲に終る者を正格小節と云ひ、樂曲最終の小節中の一部分を割きて、樂曲の始めに移したるもの、即ち弱聲に始まり強聲に終る者を、變格小節と名つけますが、箏曲には之を用いたる處至て少き者であります。

(ハ) 雜記号

以上説き來れる音の高低長短強弱に關する諸記號の外之に關して特別の記號あり、特に箏曲に於ては之を能く心得べき必要が有ります。

(ア) 延長記號 (・)

或る音符又は休止符を、其一定の長さの貳分の一以上、貳倍迄を、隨意に延長することを得る記號にして、樂曲の終りに用いること多し、假令へは箏と三絃との合奏等の時に最終の音は、双方氣息を相圖りて、最も緩漫に合奏し終るが如き場合に用います。

(イ) 速度記号

樂曲進行の速度を示す記號にして或る樂曲の一部分を、特に長く或は短かく、彈奏すべき記號で有て、樂譜の上部に左の通りに記して之を示します。

最モ緩ニ 緩徐ニ 漸々早ク 急速ニ 漸々緩徐ニ

(ウ) 特別強弱記號

樂曲中の或る音符を、特に強く或は弱く、彈奏すべき記號にして、強聲の時には音符の上部に(ハ)を附し、弱聲の時には(ウ)を附して之を示します。此弱聲の彈奏法は、俗に横爪と稱して、多く拇指の爪角にて特に弱く彈奏するものであります。

(エ) 濁音法 (タ)

樂曲中成る音符を濁音となすものにて、其彈奏法は、左手示指の指頭と、其彈すべき絃に當れる琴柱より右側の絃下に挿入れ示指の爪の上面を少しく絃に觸れつゝ右手にて彈奏すべき者で有て其記号は音符の右側に「タ」の字を附して之を表はします。

(オ) 段落及終止記号

樂曲の段落を示すには||と用い終結を示すには|||を用ゐます。

(四) 運指法

奏樂上最も巧妙なる熟練を要し、一の技術に屬すべき者であります。箏曲大意抄には、右手拾七法左手八法と定めありて、此内には重複に渉るもの、又は變更記號に屬すべき者など有りて、規則整然たらざるも、箏曲を學ぶ人は、此手法の名稱を用ゐる人多ければ、此書は之を補給して用ふる事に致しました。

(甲) 右手法

右手拇指を自身の方に向け、示指以下小指までを第一絃の方に置き、小指は軽く龍角に觸れ、他の指は正しく絃上に置きて彈奏を始むるものにて、其彈奏すべき絃の位置は、龍角より大凡一寸斗りを隔たりたる處であります。

(ア) 拇指

彈奏中最も多く使用する指にて、右手法中排爪を除きては、巾の方より第一絃の方に向つて彈すべきものにて、曲譜中此指を用ふる時は、只音符のみを記して、別に何の記號をも用ゐません。

(イ) 示指 (一)

右手法中連の手法を除きては、多く第一絃の方より巾の方に向つて弾すべき者であります。此指を使用すべき場合は、音符の上部に「一」を附記します、即ち「五」又は「六」等の如し、

(ウ) 中指 (二)

右手法中連の手法を除きては、多く第一絃の方より巾の方に向つて弾すべき者にして、此指を使用すべき場合は、音符の上部に「二」を附記して之を示します、

以上拇指示指中指の三個は右手法とすべきもので無く、以下列記する者は右手法に屬すべき者であります、

(エ) 合せ爪 (合)

拇指と示指、又は中指とにて、甲乙或絃を同時に弾すべき者にして、假令「ハ」五の絃を中指にて十の絃を拇指にて一時に弾すべき時には、「五合十」の如く記し六の絃を示指にて十の絃を拇指にて一時に弾すべき時は「六合十」の如く之を記します、

(オ) 搔き手 (9)

中指に示指を添へて第一絃と第二絃とを、巾の方に向つて「シャーン」と搔くべきものであります、時として他の絃を搔べき事あるにつき、此場合は其搔くべき絃名を9の上部に附記します、

(カ) 連一名裏連 (ㄥ)

中指示指は爪の裏にて、拇指は爪の表にて三指同時に巾の方より第一絃の方に向つて撫するものにて言葉記號には「サアララン」と記してあります而して其中途の絃にて止まるか、又は第一絃まで撫し終る時は、其最終の絃は凡て拇指のみにて弾すべき者であります、故に「ㄥ」を記せる時は巾より第二絃までを三指同時に撫し、壹の絃を拇指のみにて撫すと記せる時は、巾の絃より十の絃までを三指同時に撫し、拾の絃を拇指のみにて弾すべき者であります、其他は此例に依ります、

(キ) 流し爪 (レ)

拇指の爪角にて、巾の方より第一絃の方に向つて走らすものにて、言葉記號には「カーラワン」と記して有ます、其中途にて止まるべき時、又は第一絃まで撫し終るべき時は、連と同一の記號法にて、「+」又は「+」を記して之を示します、而して最初の或絃即ち巾爲の絃は強音に、中途は弱音に、終り或絃は強音に弾すべき者であります、

(ク) 輪連 (ㄩ)

中指の爪の右脇にて第一絃を左方に向つて、其形状恰も輪を畫く如くに、「シニウ」と拂ひ撫する者であります、第一絃の外に他の絃を撫すべき時は、搔手と同様の記號法を用ひます

(ケ) 引連 (ㄱ)

中指に示指を添へ、第一絃より巾の絃まで引き終るものにして、最初の或絃を強音に、中途は弱音に、最終の或絃は強音に弾する者であります、而して其中途にて止まるべき時、又は巾まで引き終る時は、連と同様記號を用ひます、即ち神の時は巾の絃迄神の時は十の絃にて止まり、其止まるべき者は中指のみで弾すべき者であります、

(コ) 半引連 (ㄴ)

引連と同様の彈法なれども、最初中途の絃即ち第五第六の絃より初め、巾の絃にて終るべきもので有ます、其中途にて止まるべき時、又は巾の絃まで引終るべき時等は引連と同様即ち神又は神の如く之を記します、

この記号は、三指の左手法に於て、無の記号に下列記号する者は、右手法に用ひるべき者でありませぬ。

(エ) 合せ爪 (合)

拇指と示指、又は中指とにて、甲乙二絃を同時に弾すべき者にして、假令へば五の絃を中指にて十の絃を拇指にて一時に弾すべき時には、**五合十**の如く記し六の絃を示指にて十の絃を拇指にて一時に弾すべき時は**一六合十**の如く之を記します。

(オ) 掻き手 (9)

中指に示指を添へて第一絃と第二絃とを、巾の方に向つて「**マーン**」と掻くべきものでありませぬ、時として他の絃を掻べき事あるにつき、此場合は其掻くべき絃名を9の上部に附記します。

(カ) 連一名裏連 (V)

中指示指は爪の裏にて、拇指は爪の表にて三指同時に巾の方より第一絃の方に向つて撫するものにて言葉記號には「**サアラーン**」と記してありませぬ而して其中途の絃にて止まるか、又は第一絃まで撫し終る時は、其最終の絃は凡て拇指のみにて弾すべき者でありませぬ、故に**V**と記せる時は巾より第二絃までを三指同時に撫し、壹の絃を拇指のみにて撫す**財**と記せる時は、巾の絃より斗の絃までを三指同時に撫し、拾の絃を拇指のみにて弾すべき者であります、其他は此例に依ります。

(キ) 流し爪 (レ)

拇指の爪角にて、巾の方より第一絃の方に向つて走らすものにて、言葉記號には「**カーラリ**」と記して有ります、其中途にて止まるべき時、又は第一絃まで撫し終るべき時は、連と同一の記號法にて、「**又**」と記して之を示します、而して最初の二絃即ち巾爲の絃は強音に、中途は弱音に、終り二絃は強音に弾すべき者であります。

(ク) 輪連 (ワ)

中指の爪の右脇にて第一絃を左方に向つて、其形状恰も輪を畫く如くに、「**シユウ**」と拂ひ撫する者であります、第一絃の外に他の絃を撫すべき時は、掻手と同様の記號法を用ひます。

(ケ) 引連 (リ)

中指に示指を添へ、第一絃より巾の絃まで引と終るものにして、最初の二絃を強音に、中途は弱音に、最終の二絃は強音に弾する者であります、而して其中途にて止まるべき時、又は巾まで引き終る時は、連と同様の記號を用ひます、即ち神の時は巾の絃迄神の時は十の絃にて止まり、其止まるべき者は中指のみで弾すべき者であります。

(コ) 半引連 (ニ)

引連と同様の彈法なれども、最初中途の絃即ち第五第六の絃より初め、巾の絃にて終るべきもので有ります、其中途にて止まるべき時、又は巾の絃まで引終るべき時等は引連と同様即ち神又は神の如く之を記します。

(サ) 引捨 (リ)

最初引連の如く、中指示指にて第一絃の方より引き、中途より中指を除き示指のみにて、巾の絃まで引き終るものであります、其中途にて止まるべき時等は、凡て引連の如く**中**又は**神**の記號を用ひます。

(シ) 割爪 (99)

最初示指にて或る二絃を掻き、次に中指にて次の二絃(第一絃の方に當る二絃なり)を掻き、終りに拇指にて或る一絃を弾するものにて、示指及中指にて掻くべき絃は、拇指にて弾すべき絃より、中間に三四絃を隔て、第一絃の方に當る絃と掻くべき者であります、言葉記號

には「シヤク」と記入す、

(ス) 波反 (㊟)

最初中指指にて第一二絃を搔き、次に巾爲の絃を中指指の爪裏にて、左方に向つて撫し、終りに又第一二絃を初めの如く搔く者であります、而して第一回目を表と云ひ、第二回目を裏と云ひ、第三回目を表と云ふ、時として第貳回目の裏に初まり、第三回目の表の両度にて終る事あり、

(セ) 擦爪一名裏擦 (㊟)

中指の爪と、其指頭との間に、或る一絃(第四絃の場合多し)を挟み、最初左方に向つて「ズ」と擦り、次に右方に向つて「ズー」と擦るべきもので、記號「 \curvearrowright 」は右方に即ち矢の方位に向つて擦るべきものであります、而して第四絃の外凡て其擦るべき絃を記號の下部に記します、

(ソ) 排爪一名裏爪 (ス)

拇指の爪の裏角にて、或る絃を第一絃の方より手前の方に向つて「リン」と排ふものであります、時として中指又は示指にて排ふ事有り、此場合は中指又は示指を其絃の下に入れ、上方に向つて「リン」とはねる者であります、右同様其音符の上部に「ス」を附記して之を示します(示指及び中指の排爪には「ス」の外に「一」を附記す)

(タ) 押合セ爪 (五×六)

甲乙二絃の第一絃の方に當る絃を押しつゝ其押したる手前の絃と同時に「ツレン」と演奏するものであります、其押すべき程度は、手前の押さざる絃と同音になる様に押すべきものであります、其記號は別に之を用ゐず、其弾すべき絃名を重ねて記す事と致します、「五×六」は五の絃を押しつゝ六絃と同時に弾すべき場合を示したのであります、

(チ) 散爪 (五)

中指の爪の右脇にて第一絃と「シユウ」と擦るものにて、輪運に似たり、然れども輪運は其手法、恰も輪の廻るが如く、第一絃の上右側一尺位ひの處より、半月形を畫きて、左方に向つて

第一絃を擦り、散し爪は第一絃の上右側二三寸の處より初むる者であります、而して他の絃を擦るべき時は、搔手と同様の記号法を用ゐます、

(ツ) 拘爪

拘爪とは俗に「カラカタラン」と稱するものにて、最初或る一絃の上に拇指を置き、其絃より五本向ふの絃に示指を掛け、手前の方に向つて貳つの絃を弾き、次に又拇指より六本向ふの絃に中指を掛けて、手前の方に向つて貳つの絃を弾じ、終りに拇指をかけたる絃を弾すべき者であります而して其拇指にて弾する絃の名に依りて、九拘十拘等其名を異にします、今九拘なれば示指にて五六と弾ト、次に中指にて四五と弾ト、終りに拇指にて九の絃を弾する者にて此の樂譜には別に異なりたる符号を用ひません、而して此の拘爪は、四分音符五個にて弾する者であります、

(テ) 早拘爪

拘爪の音符の早き者にて、通常四分音符三個にて弾する者が多くあります、記号は拘爪と同く別に異りたる符号を用ゐません、

(ト) 半拘爪

半拘爪の中に、向半、短半、皆半、等の種類がありますが、此樂譜にて弾するには、中指示指拇指にて演奏する符号を記憶すれば、演奏上別に不便を感じる事はありません、

以上合せ爪、半拘爪に至る迄を右手十七法と定めてあります、

ち矢の方位に向つて擦るべきものであります、而して第四絃の外凡て其擦るべき絃を記號の下部に記します、

(ソ) 排爪 一名裏爪 (ス)

拇指の爪の裏角にて、或る絃を第一絃の方より手前の方に向つて「リン」と排ふものであります、時として中指又は示指にて排ふ事有り、此場合は中指又は示指を其絃の下に入れ、上方に向つて「リン」とはねる者であります、右同様其音符の上部に「ス」を附記して之を示します、(示指及び中指の排爪には「ス」の外に「」を附記す)

(タ) 押合セ爪 (五×六)

甲乙二絃の第一絃の方に當る絃を押しつゝ其押したる手前の絃と同時に「ツレン」と演奏するものであります、其押すべき程度は、手前の押さざる絃と同音になる様に押すべきものであります、其記號は別に之を用ゐず、其弾すべき絃名を重ねて記す事と致します、**五×六**は五の絃を押しつゝ六絃と同時に弾すべき場合を示したのであります、

(チ) 散爪 (五)

中指の爪の右脇にて第一絃と「シュウ」と擦るものにて、輪連に似たり、然れども輪連は其手法、恰も輪の廻るが如く、第一絃の上右側一尺位ひの處より、半月形を畫きて、左方に向つて

第一絃を擦り、散し爪は第一絃の上右側二三寸の處より初むる者であります、而して他の絃を擦るべき時は、搔手と同様の記号法を用ゐます、

(ツ) 拘爪

拘爪とは俗に「カラカラチン」と稱するものにて、最初或る一絃の上に拇指を置き、其絃より五本向ふの絃に示指を掛け、手前の方に向つて貳つの絃を弾き、次に又拇指より六本向ふの絃に中指を掛けて、手前の方に向つて貳つの絃を弾じ、終りに拇指をかけたる絃を弾すべき者であります而して其拇指にて弾する絃の名に依りて、九拘十拘等其名を異にします、今九拘なれば示指にて五六と弾ト、次に中指にて四五と弾ト、終りに拇指にて九の絃を弾する者にて此の樂譜には別に異なりたる符号を用ひません、而して此の拘爪は、四分音符五個にて弾する者であります、

(テ) 早拘爪

拘爪の音符の早き者にて、通常四分音符三個にて弾する者が多くあります、記号は拘爪と同しく別に異りたる符号を用ゐません、

(ト) 半拘爪

半拘爪の中に、向半、短半、皆半、等の種類がありますが、此樂譜にて弾するには、中指示指拇指にて演奏する符号を記應すれば、演奏上別に不便を感じる事はありません、以上合せ爪より半拘爪に至る迄を右手十七法と定めてあります、右十七の手法の記号には、凡て音符の記号を附記して、其長短を表はします、

(乙) 左手法

左手は平常琴柱の右方絃上に安置し、以下に示す記号に従ひ、運指すべき者であります此左手法は、重に變更記号に屬すべき者にて、右手にて演奏する絃音に、高低其他の變化をなさしむべき手法であります、

(ア) 掩 (X) 拾 (X) 拾 (X)

或る絃を弾したる後に、其余音を押し高むべき者にして、其半音程を高くすべき時はX、一

音程高くすべき時は××の記号を、絃名の右側に記るします。而して此押したる手は暫らく押し止めの、其高めたる余音を持続すべき必用があります。指は重もに示指と中指を併用します。前の記号は拾の絃に就て示したる者にて以下此例を用います。

(イ) 押 (拾×拾××)

或る絃を初めより押して、彈すべきものにて、半音程高くする音の押には×、一音程高くすべき音の押には××を、其音符の下部に附記します。通常示指中指を併用するも、或絃に跨りて押すべき時、假令へば斗九又は十八又は七八等を或絃共押すべき場合(俗にかけ押と稱す)には、巾の方に當る絃を拇指にて押し、次の絃を示指中指にて押すべき者であります(半音高くなる様に押すは通常の度合に一音は少しく強く押すのであります)

(ウ) 突 (ツ)

或る絃を彈たる後、急に其絃を中指の頭にて突き、一時其余音を高上せしむる法であります(掩は其余音を押し止め突は突たる手を急に放つの別あり)記号は「ツ」を音符の右側下に附記します。

(エ) 騰 (エ)

或る絃を彈たる後、其余音を半音程低下せしむる法にして、左手拇指中指にて其絃をつまみ、右方に向つて引きゆるめるものであります。記号は音符の右側下に「エ」を附記します

(オ) 重押 (ツ×拾)

或る絃を彈たる后ち、押して一旦放ち、又急に押し止むる者であります。

(カ) 搖吟 (拾)

或る絃を彈したる後、其余音を搖動する者にて、突を數回重ね、終りの絃を押し止むる法であります。

(キ) 押放 (ホ)

或る絃を押しして彈たる後、急に放つものであります。

(ク) 左手彈奏 (左)

左手示指の指頭にて、或る絃を彈すべき者にて、右手と交互に彈すること多し。符號は絃名の上部に「左」の字を記して之を示します。從來左手八法と稱するは、前記左手彈奏を除き押撫なる一手法を加へて、八法となしおれど、此書には之を除き、左手彈法を加へて八法と致します。

(五) 彈奏の姿勢

箏を彈するには、少しく箏の尾、即ち左方に向ひて端座し、(山田流にては琴と直角に端座し)行儀正しかるべきものであります。唱歌中首を振る事等、見苦しさ体度をなすべからず、且つ左手は常に左方絃上に安置し、左手法を要すべき時の外、動かすべき者ではありません。初進の人の樂譜に依りて箏曲を學ぶには、毎日三四十分間宛樂曲の少部分を反覆練習するを宜しとし、余り長時間に亘るか、又は一時に曲譜の多くを試みるは益なき者であります。又初進の人は絃を取違へて彈奏する事多きに就き、龍角の右側に紙片を貼付け、是に絃の名即ち一より十迄と斗爲巾の三字を記し置けば、樂譜を見つゝ彈奏することを得、斯くして漸々熟練する時は絃を見ずして右手は自然に我欲する絃上に至るべき者であります。

第三編

歌詞

四季の花

春は花、夏はたちばな、秋は菊、合冬は水仙、梅の花

下に附記します。

(エ) 騰 (ユ)

或る絃を弾いたる後、其余音を半音程低下せしむる法にして、左手拇指中指にて其絃をつまみ、右方に向つて引きゆるめるものであります。記号は音符の右側下に「ユ」を附記します。

(オ) 重押 (拾)

或る絃を弾いたる后ち、押して一旦放ち、又急に押し止むる者であります。

(カ) 搖吟 (拾)

或る絃を弾いたる後、其余音を揺動する者にて、突を數回重ね、終りの絃を押止むる法であります。

(キ) 押放 (拾)

或る絃を押して弾いたる後、急に放つものであります。

(ク) 左手彈奏 (左)

左手示指の指頭にて、或る絃を弾くべき者にて、右手と交互に彈すること多し、符號は絃名の上部に「左」の字を記して之を示します。

從來左手八法と稱するは、前記左手彈奏を除き押響なる一手法を加へて、八法となしわれど、此書には之を除き、左手彈法を加へて八法と致します。

(五) 彈奏の姿勢

箏を彈ずるには、少しく箏の尾、即ち左方に向ひて端座し、(山田流にては琴と直角に端座し)行儀正しかるべきものであります。唱歌中首を振る事等、見苦しき体度をなすべからず、且つ左手は常に左方絃上に安置し、左手法を要すべき時の外、動かすべき者であります。初進の人の樂譜に依りて箏曲を學ぶには、毎日三十分間宛樂曲の少部分を反覆練習するを宜しとし、余り長時間に亘るか、又は一時に曲譜の多くを試みるは益なき者であります。又初進の人は絃を取違へて彈奏する事多きに就き、龍角の右側に紙片を貼付け、是に絃の名即ち一より十迄と斗爲巾の三字を記し置けば、樂譜を見つゝ彈奏することを得、斯くして漸々熟練する時は絃を見ずして右手は自然に我欲する絃上に至るべき者であります。

第三編

歌詞

四季の花

春は花、夏はたちはな、秋は菊、合冬は水仙、梅の花、

門松

君が代は、つくや手まりの、音もがな合はやす合拍子の若菜草、につこり、笑顔や門に松ものもふ、どうれ、よき春で、御座ります合福や徳若、御萬歳、誠にめでたき千代の春

鶴の聲

軒の雨、立寄るかけも、難波津や合蘆ふく宿のしめやかに、語り明せし可愛とは、嘘か誠

か其言の葉に合鶴の一勝幾千代までも、末は互ひの友白髪、

黒髪

黒髪の、むすばれたる思ひをば合とけて寝た夜の枕こそ、獨寝る夜はあだ枕袖は片敷、夫とやと云ふて合思痴な女子の心と知らで、しんと更けたる鐘の聲、夕べの夢の今朝覺めてゆかしなつかしやるせなや、積ると知らで積る白雪、

金剛石の曲

前彈 金剛石も磨かすば、球の光りは添はざらん、人も學びて後にこそ、誠の徳は顯はるれ手事三段時計の針の絶えまなく、めぐるが如く時の間も光陰惜みて胸みなは、いかなる業かならざらん、

夕顔

住は誰、訪ひてや見んと黄昏に、寄する車をとつれも、絶て床しき中垣の、隙間もどめて垣間見や合かざす扇に焚しめし、空蒸物のほのくんと、主は白露光を添へて手事いと榮ある夕顔の、花に結びし假寝の夢の、覺めて身にしむ夜半の風、

越後獅子

越路湯、御國名物ごまぐなれど、田舎訛りの片言交り、しら兔なる言の葉に、面白がらしそなこと直江、浦の海人の子が、七つか八つめ鰻まで、續や網芋の綱手とは、戀の心をこめ山の、當飯うわ氣で黄運も、なに糸魚川い魚の、もつれもつるく草浦の、油うるしと混交て、末松山の白布縮は、肌のとこやらが、見へ透く國の風流を、うつし太鼓や笛の音も、彈ひて唄ふや獅子の曲合むかい小山のしちく竹、枝節をろへて、段を細かに十七が、室のこぐちに晝寝して、花のかかるを夢に見てころ手事夢の占ひ越後の獅子は、牡丹は持ねど富貴は己が姿にさかせ舞納む、すがたに咲かせまひおさむ、

新高砂の曲

前彈 新高砂や、此浦船に帆を上げて、月諸共に出汐の合浪の淡路の鳴かけや手事遠くなるこの沖、きよ早仕の江につらにけり合はや仕の江につらにけり、

千鳥の曲

前彈 しの山、さしでの磯にすむ千鳥合君が御代をば八千代とどなく合君が御代とば八千代とどなく手事淡路島通ふ千鳥の雷く聲に合夜幾ねざめぬ須磨のせさもり合いくよねざめぬ須磨の關守

茶音頭

世の中に、勝れて花は吉野山、紅葉は龍田茶は宇治の、都の辰巳より合廓は都の未申すさとは誰が名に立って、濃茶の色の深みどり、松の位に競ては合園といふも低けれど情は同じ床飾り合かざらぬ胸の裏表、ふくささばけぬ心から、聞けばをもはくちがひ棚、逢ふて何して香合の、柄杓の竹は直なれど、うちは茶杓のながみ文字手事憂をはらしの初昔昔唱の祖父婆と、成まで釜の中さめず合縁はくさりの末長く、千代萬代へん

春の曲

前彈 鶯の谷より出づる聲なくば合春くる事をたれか知らまし合深山には松の雪だに消ぬなくに合都は野邊の若菜摘みけり合世の中に絶えてさくらのならせば春の心はのせけからさし合駒なべていざ見に行ん古里は、雪とのみこそ花はちるらん手事我宿に咲ける藤浪立かへり、すぎがてにのみ人の見るらん、こね絶えずなけや鶯一とせに、ふたふびとだにくべき春かは

ならざらん、

夕顔

住は誰、訪ひてや見んと黄昏に、寄する車のをとづれも、絶て床しき中垣の、隙間もとめて垣間見や、合かざす扇に焚しめし、空薫物のほのくもと、主は白露光を添へて、手事いとく榮ある夕顔の、花に結びし假寝の夢の、覺めて身にしむ夜半の風、

越後獅子

越路湯、御國名物さましくなれど、田舎訛りの片言交り、しり宛なる言の葉に、面白がらしそなこと直江、浦の海人の子が、七つか入つめ鰻まで、續や網芋の綱手とは、戀の心をこめ山の、常飯らの氣で黄連も、なに糸魚川の魚の、もつれもつるく草浦の、油うるしと混交て、末松山の白布縮は、肌のをこやらが、見へ透く國の風流を、うつし太鼓や笛の音も、弾ひて唄ふや獅子の曲、合むかい小山のしちく竹、枝節をへて、段を細かに十七が、室のこぐちに晝寝して、花のかかるを夢に見てころ、手事夢の占ひ越後の獅子は、牡丹は持ねご富貴は己が姿にさかせ舞納む、すがたに咲かせまひおさむ、

新高砂の曲

浦高砂や、此浦船に帆を上げて、月諸共に出汐の、合浪の淡路の嶋かげや、手事遠くなる

千鳥の曲

前彈しはの山、さしでの磯にすむ千鳥合君が御代をば八千代とぞなく合君が御代とば八千代とぞなく、手事淡路島通ふ千鳥の音く聲に、合夜幾ねざめぬ須磨のせさもり合いくよねざめぬ須磨の關守

茶音頭

世の中に、勝れて花は吉野山、紅葉は龍田茶は宇治の、都の辰巳うれよりも合廓は都の未申すさとは誰が名に立して、濃茶の色の深みどり、松の位に競ては合園といふも低けれど、情は同じ床飾り合かざらぬ胸の裏表、ふくささばけぬ心から、聞けばをもはくちがひ棚、逢ふて何して香合の、柄杓の竹は直なれど、ろちは茶杓のながみ文字、手事憂をはらしの初昔昔咄の祖父婆と、成まで釜の中さめず、合縁はくさりの末長く、千代萬代へん

春の曲

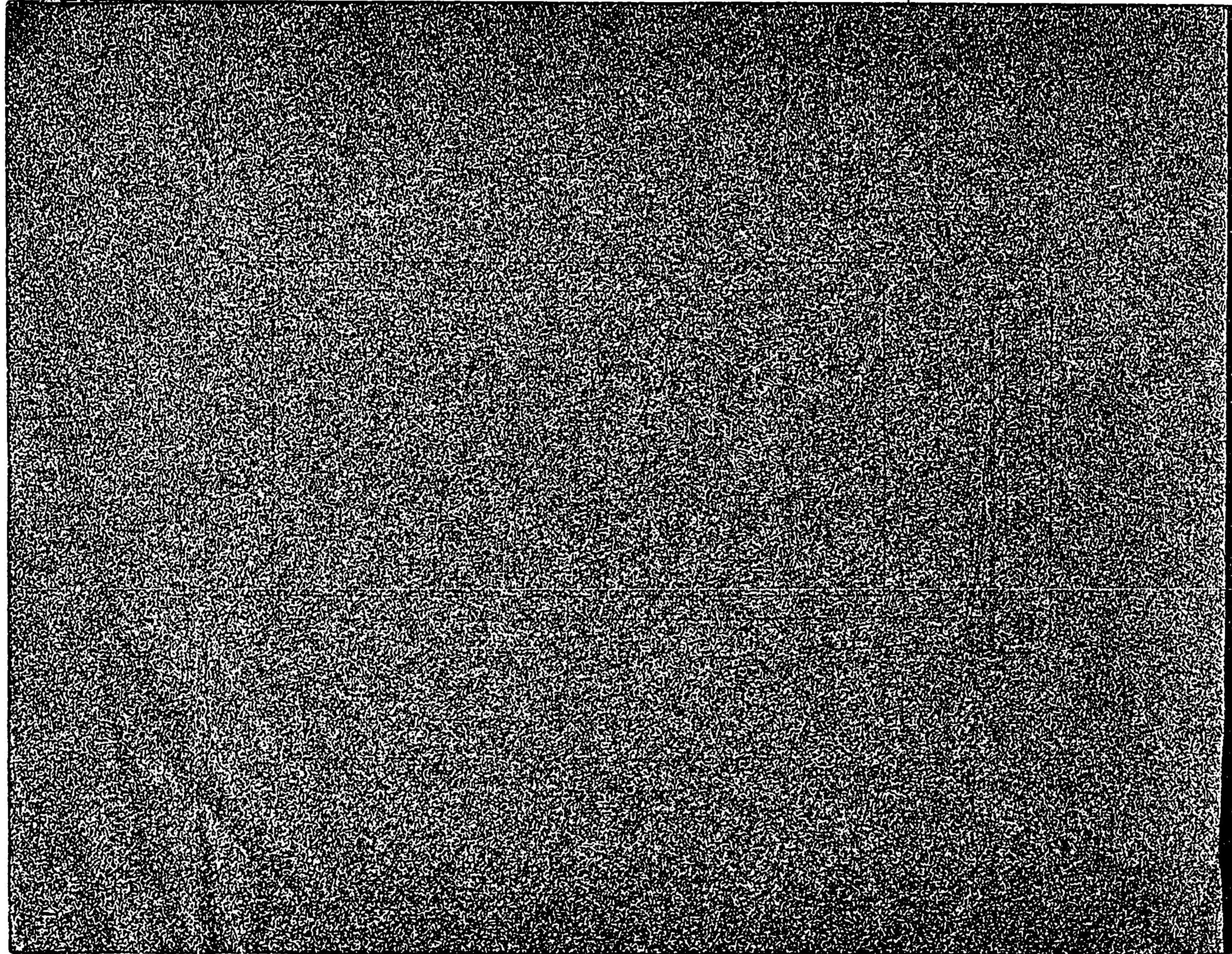
前彈 鶯の谷より出づる聲なくば合春くる事をたれか知らまし合深山には松の雪だに消ゆるなくに合都は野邊の若菜摘みけり合世の中に絶ゆるさくらのなかりせば春の心はのぞけからまし合駒なべていさ見に行ん古里は、雪とのみこ花はちるらん、手事我宿に咲ける藤浪立かへり、すぎがてにのみ人の見るらん、こね絶ゆるすなけや鶯一とせに、ふたふびとだにくへき春かは

小督の曲

雄鹿なく此山里と詠じけん、嵯峨のわたりの秋の頃、千草の花もさましく、虫のうらみも深き夜の、月にまつ虫まねくは尾花、萩には露の玉虫や、そよぐをぎ出くつは虫、鳴くねにつれて仲國が療の御馬たまはりて、とのぬ姿のふちばかま、尋ぬる人の面影に、たつうすぎりの女郎花、それがあらぬかまぼろしの、よもぎが鳥ね尋ねわび、駒ひきとむる、ささのくま合やすらふ影の松風に、通ふ、かよふつま音妻戀の、あゝ聲はねによる鹿にあらねども、昔覺える笛竹の、合はす調へにまがひなき、聲をしるべに慕ひよる、嵯峨野の奥の片折戸、想夫戀の唱歌は、比賣のつばさ雲井を慕ふ盤渉關のしらべは、松の連理の枝に

通ふ、小督の局つはらの世を忍ぶ、住家すまがもあすは大原に、替へん姿なまじの名残なごりとて、夜半よはは手ならず
君が妻琴、いは越す思ひせきかねて、涙に袖をかしばばや、人目をいかくあやめがた、糸
の色ねをしるべにて、さし入る月の雲井くもいより、細使こまかいに参りしと、かしこき君のみことのり、
野邊のへのおちあちわけさつる、露の玉章たまじょうさしよする、妻戸つまどのはしのぬんのつな、又引結ぶれ
んかへりごと、添へてたまはるいつ、衣、きぬくをくる程もなく、迎の車奉る合昔にか
へる百敷や、むかしにかへるもとしきや、千代の契りの松の言の葉





はしか地

公徳公事の手記... 倭文あるはきらに... 月々の夕の... 及ぶ他の... 希くも増すの士...

様ある 其の夕

東公國の宮...

胡蝶...

平調子

か — げ — も —
 九 十 斗 十 九 八 七
 為 斗 十 九 十 八 九 十 斗
 の — 志 — 志 — 志 —
 七 八 九 十 斗 為 斗 十
 せ — 志 — か ば — い
 七 七 〇 八 七 九 為 斗 十
 と か そ の 志 と の 志 — に
 九 八 九 九 八 十 九 八 七

(五)

合 } 六 七 七 八 九 十 斗 為 八 八 中 } 中 〇 中 中 七 七 為 斗 為 斗
 テン コ ロ コ ロ ム テン ツ テン ツ テン ツ テン ツ テン ツ テン ツ テン ツ テン ツ テン ツ テン ツ
 十 中 為 斗 十 九 八 七 七 八 九 為 斗 五 十 九 十 斗 七 八 六 七 斗
 ひと — こ — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 —
 斗 為 中 為 斗 斗 十 九 九 斗 十 九 七 九 八 七 十 九 八 七 六
 も 志 — は — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 — 志 —
 五 五 六 七 〇 七 九 五 五 十 七 八 九 五 十 九 為 斗 斗 十 九 八
 志 — ら — か —
 九 十 九 八 〇 七 〇 七 〇 〇

(六)

黒髪 平調子

くろ—か— み—の— むす—ば— ね—た—
緩徐ニ 半拍子 間休ム 一拍手
 テーン チン テン ツン テン ツーン カ ラ ガ ラ ツン ッ テン チン ツーン
 八 〇 九 八 | / 七 六 五 } | 四 五 六 〇 | ニ 三 三 三 六 / 七 八 七 六 〇 |

る— おむ— ひ—を—は— とけ—て—
 テン ツン テン チン ロ ツン テン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン
 五 四 五 } | 巾 為 斗 十 九 | 八 七 三 三 | 八 } 六 七 | 八 } 七 八 | 九 〇 五

ね—た— よ—の— まく—ら—お—そ—
 ツン ツン テン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン
 四 | 九 } | 十 九 九 } | 八 七 | 八 九 十 九 | 八 九 七 八 七 六 | 五 } 四 五 |

ひと—り— あだ—ま—く—ら—
一拍手 一拍手 一拍手 一拍手
 ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン
 六 / 七 八 七 | 六 五 四 〇 | 五 五 六 七 六 | 五 三 四 五 〇 | 五 } 九 十 半 |

そ—で—は— かぬ—志—く—
 テン ツン テン チン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン
 十 九 八 / 為 斗 } | 五 〇 | 十 } 斗 / 為 斗 十 九 十 斗 | 十 九 八 } | 七

う—ま—じ—や—と— 以—ふ—て—
 ツン ツン } | チン ツン チン テン | } | コ ロ ツン ツン | トン トン 八
 六 六 } | 七 六 七 八 | } | 十 九 八 七 | 三 三 八

ツ テ チン チン ツン テ ツン コー ロ ツン ツン カ ラ カ ラ チ
 斗 為 巾 | 為 斗 十 九 八 七 | 六 五 八 九 七 八 | 為

ツ テン ツ ト テ ツ ト ツン コー ロ ツン ツン チン テン チン
 斗 | 十 六 五 十 九 五 | 十 斗 十 九 | } 九 八 九 八

コー ロ ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン
 五 四 三 / 二 三 四 五 四 三 二 | 六 七 八 } | 七

お—の—ま—と—ろ—と—志—ら—
 テ ツン ツン テン チン ツン ツン テン ツン ツン ツン ツン
 十 九 九 〇 | 八 } 七 六 | 七 八 九 十 九 | 八 七 六

と—お—け—た—る—カ—
 ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン
 三 二 三 四 〇 | } 五 六 } | 七 六 五 } | 九 十

子調子

れ — た —

ラ ッ ッ テン チン ツー
六 六 七 八 七 六 〇

とけ — て —

ツ テン ツ ト テ ッ ト
六 七 八 七 八 九 〇 五

ら — ぶ — そ
テ ッ コー ロ ツ テン ツ テン
九 七 八 七 六 五 四 五

ら —
ト ッ テン レン ツ テン
三 四 五 〇 五 九 十 半

か — ぶ — く
テン ッ テン コー ロ ツ テン
十 九 十 斗 十 九 八 七

(七)

つ ま じ や と 以 — ふ — て
ツ ツ チン ツ チン テン 合 カ ラ カ ラ テン ツン
六 六 七 六 七 八 十 九 八 七 三 三 八 四 五 三 四 八 七 斗 斗

ツ テン チン チン ツン テ ッ コー ロ ツ テン カ ラ カ ラ チン トン コー ロ ツン テン ツン テン
斗 為 中 為 斗 十 九 八 七 六 五 八 九 七 八 為 七 中 為 斗 十 斗 十 為

ツ テン ツ ト テ ッ ト テン コー ロ ツン チン テン チ テ ッ コー ロ ツン ツン
斗 十 六 五 十 九 五 十 斗 十 九 九 八 九 八 七 九 八 七 六 七 斗 九 九

ら — ぶ — お ね
コー ロ ツ ツ テ ッ コー ロ ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン
五 四 三 二 三 四 五 四 三 六 七 八 七 八 九 〇 五 四 九

ぶ の ま こと ろ と — ぶ — ら — で — ぶ ん
テ ツン ツン テン チン ツン ツン テン ツン コー ロ ツン トン テン ツン ツン ツン
十 九 九 〇 八 七 六 七 八 九 十 九 八 七 六 五 〇 五 六 七 五 四

と ぶ け た る — か ね — の — ぶ — ぶ
ル ッ テン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン
三 二 三 四 〇 五 六 七 六 五 九 十 中 為 斗 十 九 八 七 三

為九中八中為中為斗為斗為斗

三〇八五四三二

四四五四三四三

十九九七

八七八七六

為七七為七為中中為斗為中

十八九十九八八七六

六段 七 八 六 五

五 四 三 二 一

〇 九 十 斗 十 九

八 九 十 九 八

為斗為市

十 七 〇 八

(五)

金剛石

平調子、第四絃一音上ゲテ双調(ト)トナシ第九絃ヲ第四絃ノ裏ノ双調(ト)トナシ第六絃ニ半音上ゲテ盤渉
(白)トナシ斗ノ絃ヲ第六絃ノ裏ノ盤渉(白)トナシタル者ナリ

前弾(手事=段目合奏)

シャーン シャン シャン テン トッ ツン シャン ショントン テ ッ コーロ リン テン ツーレン ト テン ッ テン
六合斗 〇 七合為 斗 } | 七合為 六合斗 五十九 | 十九八八 } | 九x〇 五十九 | 十

トッ ツン トッ テン トッ テン ッ ト コーロ リン シャーン シャン カ ラ カ ラ テン シャン
六斗 } | 七為八中 | 九八中為斗 } | 六合斗 } | 六七五六十 } | 七

タ テ チン テ ッ ト ツ コ ロ リン ツン テン ッン コ ロ リン ツーレン シャーン カ
九八九八七 | 三 八 七 六 五 六 | 七 八 / 十 九 八 | 九x〇 || } } 七合斗 〇 | 六

ラ カ ラ テン カ ラ カ ラ ツン テン ッン シャーン シャン 一絃輪連 止 三拍子
七 五 六 十 } | 四 五 三 四 八 七 八 } | 六合斗 〇 | 五合斗 ワ / 十 九 八 | 八 十 九

リン ツン テン レ ッ トン テン シャーン カ ラ カ ラ テン シャーン シャーン コーロ リン
八 九 | 十 斗 七 七 為 } | 七合斗 〇 八 九 七 八 | 為 } | 九 九 中 為 斗

五 ——— は ——— そ ——— は ——— ざ ——— ら ———
コ ロ リン テン ツン シャン シャン リン シャン シャン シャン カ ラ カ ラ
中 為 斗 十 | 九 十 九 九 斗 | 九 九 十 四 五 三 四

人 — も — ま 夫 — び —
コーロ リン シャーン トン トン テン ま 夫 連 斗 連 斗
中 為 斗 } } } | 七合斗 〇 八 八 | 中 } | 七 斗 | 九 九 十

に — 夫 — そ —
トッ シン コ ロ リン ツン トッ ロ リン ツン ル ス テン トン テン
六 七 / 中 為 斗 斗 / 十 九 八 七 七 | 八 三 三

シャーン シャン シャン ツン トン テン ま 夫 — と
九 九 為 合斗 合斗 斗 為 十 / 八 | 八 } } 七 | 八 / 九

は ——— あら ——— は ——— る ———
カ ラ カ ラ ツン シャーン シャーン チ テ チン ット コーロ リン ト
七 八 六 七 斗 } | 九 九 為 斗 為 九 八 | 中 為 斗 五

シャーン シャン シャン トッ シン ット コーロ リン ツン シャーン トン テン ト
九 為 為 } | 八 中 八 七 為 斗 | 十 九 五 合斗 } | 六 七 五

金 剛 石

トシ第九絃ヲ第四絃ノ裏ノ双調(ト)トナシ第六絃ヲ半音上ケテ盤涉
(白)トナシタル者ナリ

ヤン シヤン トン テ ツ コーロ リン テン ツーオン ト テン ツ テン
七合為 六斗 五 十 九 | 十 九 八 八 } | 九x〇 五 十 九 | 十

コーロ リン ヤーオン ヤン カ ラ カ ラ テン ヤン
八 中 為 斗 } | 八合中 〇 六斗 } | 六 七 五 六 十 } | 五斗

おん ———— ごう ————

コーロ リン ツン ツン コーロ リン ツーオン ヤーオン カ
六 五 六 | 七 八 / | 十 九 八 | 九x〇 || } } 五斗 〇 | 六

あ ———— みが ———— か ———— ち ———— ば
ツン テン ツン ヤーオン ヤン 一絃輪連 三拍子 江ノ
八 七 八 } | 六斗 〇 | 五斗 十 七 / | 十 九 八 | 八 十 九

止 二拍子 三拍子 たま ———— の ———— ひ か ————
ヤーオン カ ラ カ ラ テン ヤ ヤ コーロ リン
} | 七合為 〇 八 九 七 八 | 為 } | 九 十 中 為 斗

(五)

里 ———— は ———— そ ———— は ———— ら ———— ん
ノ 中 為 斗 十 | 九 十 九 九 斗 | 九 九 十 曲 五 三 曲 | 八 曲 五 九 | 十 斗 為 x

人 ———— も ———— ま ぶ ———— び ———— て ———— のち
コーロ リン ヤーオン トン トン テン ヤーオン トン 連 中 斗 連 連
中 為 斗 } } } | 六斗 〇 八 八 | 中 } | 七斗 九 九 十 斗 十 九 八 | 九x〇 十

に ———— ま ———— そ
ト シン コーロ リン ツン ツン コーロ リン ツン ツン ツン ツン ツン
} | 六 七 / | 中 為 斗 | 斗 / | 十 九 八 七 五 | 八 三 三 曲 五 | 六 斗 十 斗 } |

ま ぶ ———— と ———— の ———— と ———— く
ヤ ヤ シン ヤン ヤン ツン トン テン トン ツン テン ツン ツン ツン ツン ツン
九 九 為 六 斗 斗 為 十 / | 八 | 八 } } | 七 | 八 / | 九 五 十 | 九 十 九 九 斗

は ———— あら ———— は ———— る ———— 札 ————
カ ラ カ ラ ツン ヤ ヤ チ テ シン ツン ト コーロ リン トーオン テーオン 三拍子 初絃 三拍子 合奏
七 八 六 七 斗 } | 九 九 為 斗 為 九 八 | 中 為 斗 五 〇 | 十 〇 || } } 為 斗

ハッ シン シン トン シン ツン ト コーロ リン ツン ヤーオン トン テン トン シン コーロ リン テン トン
九 為 為 } | 八 中 八 七 為 斗 | 十 九 五 斗 } | 六 七 五 斗 | 十 九 八 七 } | 三

(5)

か — な — る — わ ざ — か ぶら ぶら

十 六 六 斗 } } 六 〇 | 七 七 為 } | 八 中 為 斗 為 | 十 九 五 十 } 為

ら — ん

斗 五 | 十 九 八 五 〇 | 十 七 中 為 斗 為 〇 五 〇 ||

純 八 平 調 子

一 般 緩 徐 =

テ ン 五 〇 | テ ン 五 | テ ン 五 〇 | テ ン 三 〇 } | テ ン 五 〇 三 〇 | テ ン 五 〇 三 〇 | テ ン 六 〇 七 〇 } |

テ ン 八 八 } | テ ン 八 七 六 〇 } | テ ン 八 〇 | テ ン 六 〇 七 〇 } | テ ン 八 〇 九 〇 } | テ ン 八 九 八 〇 } |

テ ン 七 〇 | テ ン 六 〇 七 〇 } | テ ン 五 〇 六 〇 } | テ ン 五 〇 三 〇 } | テ ン 五 〇 三 〇 } | テ ン 五 〇 三 〇 } |

テ ン 八 〇 九 〇 | テ ン 八 〇 九 〇 | テ ン 八 〇 九 〇 | テ ン 八 〇 九 〇 |

テ ン 十 斗 十 九 八 | テ ン 十 斗 十 九 八 | テ ン 十 斗 十 九 八 |

テ ン 五 〇 | テ ン 三 〇 } | テ ン 五 〇 六 〇 } | テ ン 七 〇 〇 } |

テ ン 八 三 三 八 | テ ン 九 十 七 八 | テ ン 〇 六 } |

テ ン 八 〇 九 〇 | テ ン 八 〇 九 〇 | テ ン 八 〇 九 〇 |

テ ン 中 為 斗 十 | テ ン 中 為 斗 十 | テ ン 中 為 斗 十 |

テ ン 九 〇 | テ ン 十 九 八 七 六 | テ ン 七 八 七 六 七 |

テ ン 五 〇 六 〇 } | テ ン 五 〇 六 〇 } |

(三)

ツン ショッ ツン ショウ コ ヲ ロ リン テン ショウ コ ヲ ロ リン ツン テン ツン テン
 九 九 九 九 | / 中 為 斗 十 九 八 七 | / 中 為 斗 十 九 八 七 | 十 〇 斗 } 2

シヤ シヤ テン テン テン シヤ シヤ ツン コーロ リン テン ツン テン テン コーロ リン テン ツン ツン ツン ツン
 九 九 為 為 中 九 九 斗 斗 十 九 | 十 } 斗 為 中 斗 十 九 | 八 七 六 五 } 2

シヤン コ ロ コ ロ コ リン シヤ ツン シヤ ツン シヤ シヤ テン シヤ シヤ テン テン ツン ツン ツン ツン
 九 十 九 八 七 | 六 五 七 六 | 八 } 九 十 斗 九 九 九 | 九 八 七 六 五 } 2

シヤ カア ラン テン ツン テン 七段 カ ラ カ ラ テン シヤ テン コーロ リン ツン シヤ シヤ ツン
 七 六 五 } || } } 二 三 四 五 | 五 五 四 | 三 二 一 〇 } 2

シヤ シヤ テン コーロ リン シヤ シヤ ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン
 五 五 四 | 三 二 一 〇 } 二 七 七 六 五 } 六 七 八 九 〇 一 } 2

シヤン テン テン トン コーロ リン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン
 九 八 | } 二 七 六 五 | 六 七 八 九 〇 一 | } 九 十 斗 斗 斗 九 } 2

シヤ テン コーロ リン シヤ シヤ テン テン シヤ シヤ テン コーロ リン ツン ツン テン テン シヤ シヤ テン コー
 九 為 為 斗 | 十 九 八 七 六 五 | } 九 九 為 為 斗 | 十 九 八 七 六 五 | } 九 九 為 為 斗 | } 2

コ リン ツン テン テン テン ツン テン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン
 斗 十 斗 為 十 | 斗 九 十 三 | 八 七 六 五 | 十 斗 斗 十 | / 九 八 七 〇 | 五 九 } 2

八段 漸々急進
 シヤ ツン ツン シヤ ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン
 } 七 〇 | 五 六 七 | 五 六 七 | 五 六 七 } 2

シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン
 五 六 七 | 七 八 九 | 七 六 五 | 五 六 七 } 2

シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン
 五 六 七 | 七 〇 } 八 九 八 | 八 九 八 } 2

シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン
 九 八 七 六 五 | 七 六 五 | 六 五 四 | 五 六 七 八 九 } 2

シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン
 五 六 七 八 九 | 七 六 五 四 | 三 二 一 〇 | 九 八 七 六 五 } 2

シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン
 六 〇 | 六 } 七 八 七 七 | 七 七 八 | 七 七 八 } 2

シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン
 八 七 六 五 | 七 六 五 四 | 三 二 一 〇 | 九 八 七 六 五 } 2

シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン シヤ ツン
 五 六 七 八 九 | 七 〇 } 九 〇 | 〇 九 〇 | 九 〇 } 2

コーロ リン コーロ リン コーロ リン テン テン トン コーロ リン ツン テン トン
 斗 十 十 九 八 中 為 斗 為 中 五 十 九 八 } 九 十 八
 テン テン テン テン ツン テン ツン テン : シャーン シャッ テン シャーン
 九 十 八 七 六 七 六 五 〇 } 〇 〇 五 〇 } 〇 〇
 テン テン テン トン テン トン テン + 段 シャ シャ テ シャ テ シャ テ
 三 三 三 五 } 三 五 } 三 五 } || 〇 〇 五 〇 五 〇 五
 テン テン ツン テン ツン コーロ リン テン シャ テン シャ
 七 三 〇 八 九 〇 八 七 中 為 斗 十 九 八 〇 七 〇
 シャ テン シャ ツン シャ テン シャ ツン シャ ツン シャ ツン シャ
 三 〇 八 九 十 〇 斗 七 為 〇 } 為 〇 為 } 為
 シャ テン シャ ツン シャ テン シャ ツン シャ ツン シャ ツン シャ
 中 〇 斗 七 為 斗 〇 斗 七 為 斗 〇 斗 七 為 斗 〇
 シャ テン シャ ツン シャ テン シャ ツン シャ ツン シャ ツン シャ
 十 〇 九 八 } 〇 斗 七 為 斗 十 九 十 為 中
 ツン ツン シャーン
 六 七 〇 || 〇 〇 〇 ||

八段之曲 平調子

(五)

緩徐 初段
 テン シャッ テン ツン トン ツ テン ツン テン ツン ツ テン ツン ツ テン ツン ツ テン ツン ツ
 五 〇 〇 五 四 三 二 三 四 〇 五 六 七 八 〇 五 四 三 〇 三 八 七
 ツン ナ ツン トン コーロ リン ツ テン ツン シャッ テン シャ テン ツン シャッ ツン トン テン シャ テン
 六 〇 七 六 五 四 三 二 三 四 〇 五 〇 五 六 〇 七 〇 三 八 八 〇 八
 シャ ツン トン コーロ リン ツ テン ツン テン ツン ナ ナ トン コーロ リン シャッ テン トン ナ ナ
 〇 九 五 十 九 八 七 八 九 〇 十 斗 為 中 五 十 九 八 〇 為 〇 八 中 為
 ツン ナ ツン トン コーロ リン ツ テン ツン シャッ テン シャ テン ツン シャッ ナ ナ ナ ナ ナ コーロ リン
 斗 〇 為 斗 五 十 九 八 七 八 九 〇 十 〇 十 斗 〇 為 〇 為 〇 八 中 為 斗
 トン テン ツン トン トン ナ
 五 十 七 七 七 為 八 中 為 斗 〇 〇 十 七 七 為 八 中 為 } 斗 為 中 〇
 ナ ツン トン コーロ リン ツ テン ツン シャッ テン シャ テン ツン シャッ ナ ナ ナ ナ ナ ナ ナ ナ ナ ナ
 為 斗 五 十 九 八 七 八 九 〇 十 〇 十 斗 〇 為 八 中 〇 為 斗 〇 為 斗
 リン コーロ リン ナ ツ テン ツン テン ツン コーロ リン ツ テン ツン テン ツン ナ ツン トン コー
 五 十 九 八 七 八 } 九 十 斗 十 九 八 七 十 九 十 九 八 七 六 五

^{チ トン} 七 五 四 三 二 } ^{ウ テ テ テン} 七 八 九 八 / ^{チ ツン トン} 七 六 五 | ^{テ ヲ テ} 五 四 五
^ウ 五 六 | 七 } } ^ウ 八 九 九 十 九 | ^{テ ヲ テ} 十 九 八 五
^{テ ヲ} 十 斗 為 五 | ^コ 十 九 八 七 為 為 斗 十 斗 為 中 五 | ^{テ ヲ} 十 九
^テ 十 斗 | 七 為 / 為 / 為 | 八 中 為 斗 十 | } } 八
^ウ 斗 為 八 | 中 為 / 斗 為 中 / 為 斗 五 十 十 九 | 八 七
^チ 為 | 中 為 斗 十 斗 為 五 | 十 九 八 七 四 九 | 二 七 }
^コ 八 七 六 | 五 四 三 二 } ^ウ 六 / 七 五 | ^コ 五 四 三 二 }
^コ 四 三 四 二 | 三 四 五 六 } ^ウ 六 五 六 七 } } 八 / 九 五 |

(七)

^コ 十 九 八 七 } | ^ウ 斗 斗 斗 斗 五 | ^コ 十 九 八 七 中 | 七 為 / 斗 五 | 十 九
^ウ 八 九 七 | 八 九 十 九 | 斗 十 斗 為 } | 中 為 斗 十 } | } 中 / 中 為 斗 | 十
^チ 中 中 | 七 為 中 〇 | / 中 為 斗 五 〇 | / 十 九 八 七 } | 九 十 九 十 斗 |
^チ 為 八 中 為 斗 為 | 斗 五 / 十 九 八 | 九 九 / 十 九 八 | 九 七 / 八 七
^ウ 六 | レ 一 七 } || ^ウ 四 〇 四 五 | 五 四 三 二 三 | 四 〇 五 六 五 | 四 五 四 三 二 |
^ウ 四 〇 五 七 | 六 七 七 } | 九 八 / 九 五 | 十 九 八 七 八 | 九 〇 十 斗 十 | 九
^コ 十 九 八 中 為 | 斗 為 斗 十 十 九 八 七 } 九 | 十 九 斗 七 為 } 中 為 斗 |
^ウ 五 十 斗 } | 七 七 為 } | 為 為 中 七 為 斗 十 斗 } | 九 九 十 斗 | 八 九 七

(5)

八段
ハヤッ テン

ロ リン チ ッ テ ッ トン シヤン
七 | 六 七 六 五 四 三 | 九 } || 九 八 } 三 | 七 六 五 九 } | 九 八 } 三 | 七 六

リン シヤッ ツン シヤッ ツン シヤッ テン シヤッ ツン シヤッ テン シヤッ ツン トン コーロ リン シヤッ ツン テン シヤッ ツン
五 九 交 | 九 七 九 八 | 九 九 九 十 | 九 斗 } 七 | 為 斗 十 九 斗 | 為 八 中 七

コーロ リン シヤン テン テン トン コーロ リン シヤッ ツン シヤッ テン シヤッ テン ツーシ トン コーロ
為 斗 十 九 } | 中 中 } 七 | 為 斗 十 九 斗 | 九 為 九 中 } | 九 〇 五 | 十 九

リン シヤッ ツン テン ツン コーロ リン シヤッ ツン シヤッ テン コーロ リン テン ツン テン 緩徐ニ
八 九 九 | 十 斗 十 九 八 | 九 九 九 十 | } 斗 十 九 八 七 | 八 九 十 } | 九 十

コーロ リン テン ツン テン ツン シヤ シヤ テン テン ツン テン コーロ リン テン ツン テン 中ヨリハマテ連
斗 十 九 | 八 九 十 } | 斗 九 九 中 為 | 斗 十 斗 十 九 | 十 斗 為 〇 | 六 〇

ハヤ
ハヤ
ハヤ

備考 言葉記号、内 } = ノレット附記シ } } = ノレット附記セシルハ言葉 = テ拍子ヲ取ルニ終音
上唱へ易キ言葉 = テ頭ハシクル者 = テ休止時間、異ナル = 非ズ即チ } ハ一拍子 } } ハニ拍子、休
止ナリ又弾奏、急速ナル場合ハ、即チ通常ヨイト唱フベキ休止ノレット唱フル方奏音上都合能キ
者ナリ而シテ其休止時間ハ半拍子ノ間 = 異ナル、無ケレバ歌曲 = 依リテ又唱フ音声、異ナルニ

夕 顔 平調子

た ー や ー た ー

ヤーシ ゴーロ リーン トッ テン コーロ リン トーシ
奉 〇 } } | 十 九 八 〇 | 三 八 / 中 為 斗 | 五 〇

と ー ひ ー て ー や ー

ツーン ツーン ツーン ツーン ツーン ツーン ツーン ツーン
} } | 斗 〇 } } | 為 〇 斗 〇 | 中 為 斗 / 為 十

た そ ー か ー れ

ーシ ツーシ テーシ ツン チ ツーシ カ ラ カ ラ テ
〇 九 〇 | 十 〇 斗 } } | 為 斗 〇 | 六 七 五 六 十

よ す ー る ー

リン コーロ コーロ リン テン コーロ リン テン ツン チ ツン ツン
八 十 九 八 七 六 | 五 十 九 七 七 | 七 / 九 七 七

の ー お と ー づ ー れ

チ チ コーロ リン テン ツン チ ツン テン チン ツン テン
} } | 中 為 中 為 斗 | 十 為 斗 為 斗 | 十 九 七 八 十

(5)

合中ヨ六進連
サアーラ リン

新々早ク

ツーン テーン テーン テン
七〇 八〇 九〇 八

カ ラ カ ラ テン テン ツン ツン ツン ツン
四 五 三 四 八 七 六 五 為 斗

一 テーン ツーン テン
〇 十 〇 九 〇 八

中ヨ七進連

サアーラ リーン ツーン テン テーン ツン テン ナリ ナリ ナン
レ 〇 七 〇 六 〇 五 為 〇 斗 中 為 為 為 為 中

テ レ ツ ル テ レ フ ル テ レ ツ ル ツ ル テン テ レ ツ ル テン ナ ツ テ
十 十 九 九 十 十 斗 十 十 九 九 十 十 十 斗 十 十 為 斗 十

ツ ト コーロ リン
九 五 十 九 八

一ヨ中進連

カ ラ カ ラ テン テン テーン ツン ト ツ ト ナ
九 十 八 九 中 中 為 〇 斗 六 斗 七 為

ト ツ ト テ ト フ ト テ ト ツ ト テ ツ コーロ リン ツ ル ツ ル テン
六 斗 五 十 四 九 五 十 四 九 五 十 斗 十 六 斗 十 九 八 七 七 七 八

フン テン ツーン テーン ツーン テン フン コーロ コーロ リン テン ツン ツン テン
九 十 九 〇 十 〇 九 〇 八 九 十 九 八 七 六 五 九 十 九 十 九 十

フン テン ツーン (三味線) ツ ル テーン (ナリ ナリ) ナリ ナリ ナリ ナリ (ナリ)
斗 為 八 中 七 七 八 〇 中 市 中 市 中 市 中

フン ツ ル テン (ナリ ナリ) ツ ル テン (ナリ) テ レ (ナリ) テ レ ツ ル ツ ル テン テ レ ツ
ニ 三 三 七 七 八 八 八 九 九 九 十 十 十 斗

ル ツ ナ テ レ テ レ ツ ル ツ ル テ レ テ レ ツ
斗 斗 十 十 十 九 九 九 八 八 八 七

レ コーロ リン ト ナ ト ツ ト テ ナ フ テ ト ツ
十 十 九 八 七 為 六 斗 五 十 為 斗 十 四 九

ト ナ ト ツ ト テ ツ ツ コーロ リン ナリ ナリ ナ
三 八 三 七 三 八 九 十 九 八 中 市 為 為 為

リ ナリ ナリ ナリ ナリ ナリ ナリ ナリ ナリ ナリ
市 中 市 中 市 中 市 中 為 為 為 為 斗 斗 斗

ツ ル ツ ル ツ ル ツ ル テン テーン テーン ツーン テ
九 九 九 九 九 十 斗 〇 十 〇 九 〇 八

ン ナン ナン ツーン テン (ナリ) ツ ツ テン (ナリ) ツ
〇 中 〇 為 〇 斗 〇 十 九 十 十 十

ン ナン リーン リーン リーン リーン (ナリ) ツ ル ツン
〇 十 〇 九 〇 九 〇 六 六 六

ルン ツ ルン ツ ルン (ナリ) テ レ ツ ル
六 六 六 六 十 十 九 九

テン テン テン カ ラ カ ラ テン ナン ツン シヤ シヤ テン ナン ツン
 八 〇 九 〇 八 } 四 五 三 四 八 七 六 九 五 為 斗
中ヨリ七進連
 ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 〇 七 〇 六 〇 五 } 為 〇 斗 中 為 為 為 為 中
 ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 斗 十 斗 九 斗 九 斗 十 斗 十 斗 十 斗 十 為 斗 十
引連
 ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 〇 斗 } 九 十 八 九 中 中 為 〇 斗 } 六 斗 七 為
 ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 十 四 九 五 十 斗 十 六 斗 十 九 八 七 七 七 七 八
 ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 九 〇 八 } 九 十 九 八 七 六 五 九 十 九 十 九 十
 ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 } 七 七 八 〇 } } } } 中 斗 中 斗 中 斗 中 }
 ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 七 七 八 } } 八 八 } 八 八 九 九 九 九 十 十 斗

ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 斗 十 斗 九 斗 九 斗 十 斗 十 斗 十 斗 十 為 斗 十
 ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 十 九 八 七 為 六 斗 五 十 為 斗 十 四 九 三 八 十 九 八 三 七
 ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 三 八 三 七 三 八 九 九 十 九 八 中 斗 為 為 為 為 中 斗 中 斗 中 斗 中
 ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 斗 中 斗 中 斗 中 斗 中 為 為 為 為 斗 斗 斗 十 九 九 九 九
 ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 九 九 九 九 十 斗 〇 十 〇 九 〇 八 〇 為 〇 中 〇 中 〇 中
 ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 〇 中 〇 為 〇 斗 〇 十 } } 九 九 十 } } 九 九 五 } } 十 〇 十 〇 五
五ノ鼓ヲ押シテ六ト同時ニカク
 ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 〇 十 〇 九 〇 九 〇 九 〇 九 〇 } } } } 六 六 六 } } } 六
 ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 六 六 六 六 六 六 } } } } } } } } 十 斗 九 九 九 九 八 八 八 七

新高砂之曲 雲井調子

(元)

平調子ノ第三絃ヲ半音下ゲテ断金(≡)トナシ第八絃ヲ第三絃ノ裏ノ断金(≡)トナシ第四絃ヲ一音上ゲテ双調(ト)トナシ第九絃ヲ第四絃ノ裏ノ双調(ト)トナシ第一絃ヲ一音下ゲテ第四絃ト全音即チ双調(ト)トナシタル者ナリ

緩徐=

た か さ ご

ヤン ツ ツン ヤン トン テン カ ラ カ ラ テン ツン トン テン

五 九 五 十 登 〇 } } 四 〇 九 } 五 六 四 五 九 十 三 〇 七 } } 八

や

テ ツン 七 六 / 七 六 五 二 〇 四 } } カ ラ カ ラ テン ツン トン テン ヤン テン

ニ 三 二 三 四 五 三 〇 七 } } 〇 斗

お か ん ら ふ ね に ほ

ヤン トン テン ツン トン テン ヤン テン テン コ ロ リン テン ツン テン

〇 登 } 五 五 十 / 斗 七 為 } } 中 為 / 中 為 斗 十 九 十 } } 六 七

あ げ て つ ね も ろ と も

ル ツン コ ロ リン テン ヤン テン テン 七 ツ コー ロ リン ツン トン テン

五 九 / 十 九 八 七 〇 登 } } 二 二 四 交 四 三 二 } } 六 三 三 五 〇

に 以 て 志 ほ の

ヤン ツン テン ヤン ツン 七 コー ロ リン テン ヤン ツン テン ツン トン テン ヤン

五 四 五 } 七 六 五 四 六 五 四 三 二 } } 三 四 五 / 六 三 〇 七 } } 七 為

リ テ ッ テ ツ ナ チ ナ コーロ ム 〇

八 十 九 十 斗 為 中 中 為 中 為 斗 〇

三 合 八 } } 三

み に 志 も よ は の

カ ラ カ ラ ツ 〇 中 } } 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

七 八 六 七 斗 〇 中 } } 五 登 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

} } |||

(四)

リン ト ト テ ト テ ヅン テ タ ヅ テ ヅ テ コーロ リン テン ケ リ 子 リ コーロ
 ニ ヲ 西 西 九 五 十 九 十 為 斗 十 九 斗 十 九 八 七 中 中 中 中 為
 リン ト ト テ ト テ ヅン テン タ ヅ ト コーロ リン テン コ ロ コ ロ リン テ ヅン テン
 斗 五 五 十 五 十 九 十 為 斗 五 十 九 八 七 十 九 八 七 六 五 四 五
 ヅ コ ロ コ ロ リン テン テ レ テン ト ロ トン タ リ テン テ レ テン テン シ シ コー
 六 七 六 五 四 三 二 五 五 五 二 三 二 為 為 為 十 十 十 斗 十 十 十
 ロ リン ト テ ト テ タ ヅ テ ヅ テ ヅ ト コーロ リン テン トン コーロ リン シ
 九 八 四 九 五 十 為 斗 十 九 十 六 五 十 九 八 九 三 七 六 五 十
 シ テー シ テー シ テー シ ソー テー ツー テー トン ト タ ト テ ト ヅ ト テ タ テ タ
 九 七 九 七 九 七 八 七 八 九 五 十 六 斗 五 十 四 九 五 十 斗 十 九
 ヅ コーロ リン ツル テ ヅ テ ヅ ト テ ヅ ヅ コーロ リン タ ヅ テ ヅ テ ヅ
 八 七 六 五 四 西 五 四 五 六 三 七 六 五 五 四 三 四 三 二 六 七 八

とはく なる を の

テン コーロ リン テン ^{中ヨリ九迄連} サア ラ リーン シー トン トン テン ガ ラ カ ラ ソー テン
 九 十 為 斗 十 九 八 七 九 〇 五 〇 五 五 十 七 八 六 七 斗 〇 十

おき ず 死 て
 ヅン テン タン ヅン テン ヅン コーロ リン テン シ シ テン
 九 十 為 斗 十 九 十 十 九 八 七 十 九 十 為
 み の 江
 ヅン テン タン ヅン テン ヅン テン テン テン テン
 斗 為 中 為 為 斗 十 十 九 九 九 十 斗 十 斗
 死 に け 里
 ト ヅ ト テ ヅ ト コーロ リン トン 合 テ ヅン テ カ ラ
 六 斗 五 十 九 五 十 九 八 三 七 交 七 四 五
 テ タ ヅ テ ト ヅ テ ヅ テン テン テン テン テン
 五 七 六 五 四 五 六 七 六 五 六 五 四 三 二
 り の 江
 テン テン テン テン テン テン テン テン
 七 七 六 七 九 八 七 六 五 五 四 四 四 五 六
 つ 死 に け 里
 テン ヅン テン テン ヅン コーロ リン テン ^{最モ緩徐ニ} シン シン ヅン ヅン
 七 六 五 七 六 五 四 三 二 四 五 六 七 斗 十 九

テ ナ ツ テ ツ ナ コーロ リン テン ナ リ ナ リ コーロ
 十 為 斗 十 九 斗 十 九 八 七 中 中 中 中 為
 ナ ツ ト コーロ リン テン コ ロ コ ロ リン テ ツ (ン) テン
 十 為 斗 五 十 九 八 七 十 九 八 七 六 五 四 } 五
 テ レ テン ト ロ トン ナ リ テン テ レ テン テン シ シ コー
 五 五 五 二 三 二 為 為 為 十 十 十 斗 十 十 十 十
 ツ テ ツ テ ツ ト コーロ リン ナー トン コーロ リン シ
 十 九 十 六 五 十 九 八 九 三 七 六 五 } 四
 ナー ツ ナー トッ テン ト ナ ト テ ト ツ ト テ ナ テ ナ
 八 七 八 九 五 十 六 斗 五 十 四 九 五 十 斗 十 九
 テ ツ ト テ ツ ツ コ ロ リ ナ ツ テ ツ テ ツ
 五 四 五 六 三 七 六 五 五 四 三 四 三 二 六 七 八

とは—く—なる—を—の
 ナー ラー リン シー トン トン テン ガ ラ カ ラ ツー テン
 七 六 五 七 六 五 四 三 二 } 七 八 六 七 斗 十

(四)

おき—す—死—て— は—や—す—
 ナン テン ナン ツン テン ツン コーロ リン テン シ シ ナン シ シ ナン カ ラ カ ラ テ
 九 十 } 為 斗 十 九 十 九 八 七 } 十 九 八 七 為 為 為 為 八 九 七 八 為 為
 み—の—に—に—つ—
 ナン テ ナ ツ コーロ リン テ ツ ツン ツン テン ツ テ ツ ナ コーロ リン テン ト ナ
 斗 為 中 為 為 斗 十 } 十 九 九 十 斗 十 斗 為 中 為 斗 十 } 七 為
 死—に—け—
 ト ツ ト テ ツ ト コーロ リン ナー トン 合 テ ツン テ カ ラ カ ラ ツン ト テ ト テン ツ
 六 斗 五 十 九 五 十 九 八 三 } 七 交 七 四 五 三 四 八 五 十 三 七 六
 は—や—す—
 テ ナ ツ テ ト ツ テ ツ ナ ツ テ ナ コーロ リン テン ツン テン シ シ ナン シ シ
 五 七 六 五 四 五 六 七 六 五 六 五 四 三 二 } 六 七 八 九
 み—の—に—に—
 テン テ ツン テ ナ ツ コーロ リン テ ツ ツン ツン テン ツ テ ツ ナ コーロ リン テン
 七 七 六 七 九 八 七 六 五 } 五 四 四 四 五 六 五 六 七 八 七 六 五 }
 つ 死—に—け—
 ナン ナン テン ナ ツ コーロ リン テン 最天 緩徐ニ シン シン コーロ リン ナン
 七 六 五 七 六 五 四 三 二 } 四 合 九 五 合 十 為 斗 十 九 八 } 七 } 七 } 〇 〇 〇

(調)

越後獅子

前(平調子) 中(半宮井調子) 后(平調子)

平調子

虫志—ち— が— た—

緩徐=

シャーン ツン テン ツーン コーロ リン 4 テン ー^一結輪^連 コーロ リーン ツン ナ テン トン
巻八 〇 九 八 | 七x 〇 八 七 六 | 七 五 7 | 八 七 六 〇 六 | 七 五 } 三

おく ま め い ぶ つ — さ ま — さ — ま — ぶれ

テ ツン ルーン 4ン テン ツーン テン ツーン ー^{カヨリ六}連^{サア} リン コーロ リーン ツン コー
5 | 6 } 5 〇 | 5 4 〇 | 3 } 7x 〇 | 6 〇 六 } | 八 七 六 〇 四 | 五

—ど— いか— なま—りの— かねと—ま—き—

ロ リン (ツ) シャン 江ウ コーロ リン 4 ツン テン ツン ツン テン ツン コーロ コーロ
四 三 } | 巻八 } 7 / 八 七 六 } / 七 六 五 六 } 七 八 九 十 九 八 七

—ま— 志ら—う—さ—だ— ぶ—る—ま—と

リン テン シャ シャ コーロ リン テン ツン テン ツン ツン ツン テン ナ ツ コーロ リン ツン シャ シャ
六 五 9 9 五 四 | 三 二 三 四 五 六 七 〇 八 | } 為 斗 十 九 八 七x 9 9

の—は—は— おも—志—ろ— がら—志—そ—な—ま—と

コーロ リン トツ テン シャーン カラ カラ テン ツン ナ ツン ツン コーロ リン ツン
八 七 六 | 五 } 巻八 | 〇 六 七 五 六 十 | } 斗 / 為 斗 斗 十 九 八 九 | }

なは—志— う—ら—の— あま—の—こ

シャーン ツン テン ツン テン ツン フ テ コーロ コーロ リン
巻八 〇 九 | 十 九 九 八 | 七 八 十 九 八 七

やつめ—う—ふ—だ—ま—て—う—か—や—

ツン ツン ツン コーロ リン ト コーロ ツン ー^一結輪^連 コーロ リン
七 七 | 九 十 九 七 六 | 七 六 | 五 7 / 八 七 六

て—と—は— 大—ひ—の—

ツーン トン トン テン ー^{ヨリ中}連^引 シャーン リン シャーン カラ カ
九 〇 | 三 三 八 } | 7 〇 市 } | 巻八 〇 五 六

こ—め—や— ま—の—

ツン テン ツン テン ツン トン テン コーロ リン テン ツン テン
七 | 八 九 十 九 | 三 八 / 八 七 六 | 五 } 四

—だ—て— わ—れ—ん—

ン | テン } ー^{カヨリ六}連^{サア} リン シャーン ツン トツ テン コーロ リン
〇 | 八 } | 6 〇 | 六 } 7 7x | 三 八 / 八 七

—が—は—

ラ カ ラ ツン } | 7 六 六 〇 | 五 四 五 六 | }

越後獅子

前(平調子) 中(半宮井調子) 后(平調子)

が 九

コーロリン 4 テン ^{一経輪連} コロリーン ツン ナ テン トン
 八七六 / 七五ワ / 八七 六〇六 / 七 五 } 三

めいぶつ さま ざ ま ぶれ

4ン テン ツーテン テン ツーテン ^{中ヨリ六進連} リン コーロ リーン ツン コー
 六五 四〇 } 三 } 七x〇 } 七 〇 六 } 八七六 〇 四 } 五

か なま りの かたまと ま 志

コ ロ リン 4 ツン テン ツン ツン テン ツン コ ロ コーロ
 八七 六 } 七 六 五 六 } 七 八 九 十 九 八 七

志らう さね ぶ る まと

リ ツン テ ツン テン ツン ツーテン テン ナ ツ コーロ リン ツン シヤ シヤ
 三 二 三 四 五 六 七 〇 八 } 為 斗 十 九 八 七 } 四 五 三

おも 志 ろ たら 志 そ なまと

ー ン カ ラ カ ラ テン ツン ナ ツン ツン コーロ リン ツン
 〇 六 七 五 六 十 } 斗 / 為 斗 斗 十 九 八 九 }

(置)

なは 志 うらの あまの こが ぶつ か

ヤーン ツン テ ツン ツン テン フ テ コ ロ コーロ リン ナ ツン シヤ シヤ コーロ リン
 七 〇 九 / 十 九 九 八 七 八 十 九 八 七 六 五 交 } 七 六 五 交

やつめ ぶ あ ね ま て うや

ン ツン ツン コ ロ リ ト コーロ リン ^{一経輪連} コ ロ リン ツン カ ラ カ ラ テン テ
 七 七 } 九 十 九 七 三 七 六 五 七 / 八 七 六 } 七 } 四 五 三 四 八 / 十

でと は ぶひ の こさ ろを

ツーテン トン トン テン ^{一ヨリ中進引連} ヤーン カ ラ カ ラ ツン テ ツン ツーテン
 九 〇 } 三 三 八 } 四 〇 市 } 費 〇 五 六 四 五 九 } / 十 九 九 〇 八

こめや まの たう ね うめ

ツン テン ツン テン ツン トン テン コ ロ リン テン ツン テン ツーテン カ ラ カ ラ ツン ツー
 七 八 九 十 九 三 八 / 八 七 六 五 } 四 五 六 〇 三 三 三 三 六 } 九

ね て わ れん も ぶ に

ー ン テン ^{中ヨリ六進連} ナ ツ テン ヤーン ツン ツン テン コーロ リン トーテン テン ツン
 〇 八 } 七 〇 六 } 七 七 三 八 / 八 七 六 五 〇 五 四 三 } 六 〇 三

が は ぶと うを の

テ カ ラ ツン } / 七 六 六 〇 五 四 五 六 } / 七 八 五 〇 四 〇 三 }

(四六)

もつ れ ー もつ ー
 テン テン テン テン テン テン テン テン テン テン
 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三
 十 九 八 七 六 五 三 二 一 〇

る ー る ー くさ ー りら ー の あ ー ふ ー ら
 テン テン テン テン テン テン テン テン テン テン
 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三
 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一

う る ー あ ー さ ー まじ ー は ー て ー
 テン テン テン テン テン テン テン テン テン テン
 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三
 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一

すへ ー ま ー つ ー やま ー の あ ろ ー ぬ ー の
 テン テン テン テン テン テン テン テン テン テン
 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三
 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一

ちち ー み ー は ー は ー だ ー の ー ど ー 大
 テン テン テン テン テン テン テン テン テン テン
 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三
 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一

や ー ら ー が ー みえ ー すく ー く に の ぶら ー
 テン テン テン テン テン テン テン テン テン テン
 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三
 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一

る ー を ー うつ ー あ ー たい ー まや ー ぶら
 テン テン テン テン テン テン テン テン テン テン
 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三
 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一

たふや あ の ー れよ ー
 テン テン テン テン テン テン テン テン テン テン
 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三
 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一

う る ー あ ー さ ー まじ ー は ー て ー
 テン テン テン テン テン テン テン テン テン テン
 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三
 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一

すへ ー ま ー つ ー やま ー の あ ろ ー ぬ ー の
 テン テン テン テン テン テン テン テン テン テン
 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三
 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一

ちち ー み ー は ー は ー だ ー の ー ど ー 大
 テン テン テン テン テン テン テン テン テン テン
 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三
 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一

や ー ら ー が ー みえ ー すく ー く に の ぶら ー
 テン テン テン テン テン テン テン テン テン テン
 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三
 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一

(舌)

九八七六 九十九八八九七六五 四 五 中 中 中 中 為 為 為

中 中 中 九十九八八九七六五 十 九 八 九 十 十 七 八 七 八

五六 四 五 九 十 九 八 七 九 八 七 六 五 三 八 九 十 中 為

斗 十 九 八 七 八 為 斗 十 九 八 七 九 八 七 六 五 〇 五 九 八

九 為 十 九 八 七 七 七 七 七 為 斗 十 九 八 七 六 七 七 七 七 八

七 七 八 九 八 七 斗 十 九 九 十 九 八 斗 十 九 十 為 斗

十 斗 十 九 斗 十 九 八 七 九 八 七 六 五 七 為 九 十

六 七 九 五 十 五 五 五 五 二 十 七 為 斗

為 為 為 為 為 斗 斗 斗 斗 為 為 為 七

三 二 為 為 為 七 七 七 九 八

八 九 九 九 八 七 八 七 六 五 為

為 斗 十 九 十 九 八 七 八 七 六 三 七 六 五

十 四 〇 三 〇 五 八 九 七 八

十 九 八 七 七 七 七 八 七 六 五 九 九 九

五 為 斗 十 九 八 三 七 三 八 四 九 五 十

五 十 九 八 十 八 十 八 八 七 七 八 五 四 三

リ ナ コ ロ リン テー ツン テー ナー リ ナ ナ リ ナ ナ リ ナン
八 九 八 七 六 五 | 四 五 変 変 変 中 中 中 為 為 為

リン ツ ル ツ ル ツ ロ リン ツー ナー ツ テー ツ ル テ ツン テ
八 九 九 九 九 | 十 九 八 九 十 九 十 七 七 八 七 八

リン コ ロ リ ナ コ ロ リン テン ト テン ツン テン コ ロ
九 / / 九 八 七 九 八 七 六 五 三 八 九 十 中 為

以下半音調子 (ハ 絃半音下ケル 絃一音上ケ)
ツー ナー ツー ナー ツー ナー コー ロ リン テン
斗 十 九 八 | 七 九 八 七 六 五 } 七 合 為 〇 五 合 / 九 八

シャ ナー ツン ナー コ ロ コ ロ リ テ ツン テン ツン テ ツン テン ナン
九 七 交 七 | 為 斗 十 九 八 七 交 七 交 七 交 七 八

シャ シャ ナ シャ シャ テン ツル コ ロ リン ツル ツル コ ロ
七 九 斗 九 九 | 十 九 九 十 九 八 斗 斗 斗 為 斗

リン テン ナー ツン ナー ツン テン コ ロ リン ナー ツン ツー ナー ツー ナー
八 七 九 八 七 | 交 七 十 九 八 七 六 五 斗 為 九 十

ハ (ナリナリ) シン シン (ナリナリ) テン トン (ナリ) テン トン シン シン テ ツン
合 } } 合 合 } / 五 二 } 十 七 / } 合 合 為 斗

(五)

テ シャ シャ ナ シャ シャ ナ ツ ル ツ ル テン (ナリナリ) ツ ル ツ ル ツン (ナリナリ) ツ ル ツ
為 九 九 為 九 九 為 斗 斗 斗 為 } } | 七 七 七 七 } } | 二 三 二

ル ツン (ナリ) ナ リ ナ (ナリ) ツ ル ツル ナ テン ツン テン ツン テン コー ロ リン ツン テン
三 二 } 為 為 為 / / 七 七 七 交 九 交 / 九 八 七 九 / 八 七 交 七

ツン テ レ ナ ツン ツン シャ シャ コー ロ リン ナ リ ナ ナ リ ナ ツ ル ツ ル
八 / 九 九 九 八 七 八 七 六 五 / 為 為 為 為 為 為 斗 斗 斗

テン ナ ナ ツ ナ コ ロ リン ナ ナ ツ ト コー ロ リン ナ ツン テン ツン ナ ナ コー ロ リン
為 斗 十 九 十 九 八 七 八 七 交 三 七 六 五 斗 九 十 斗 中 為 中 為 斗

以下平調子 (ハ 絃半音上ケル 絃一音下ケ)
テン } } | 四 〇 三 〇 | 〇 〇 中 } } | 五 合 三 合 八 九 七 八 九 五 十 斗 十 九 八 九 九

コー ロ リン ツル ツル ツル コー ロ リン テン ツル ツル コー ロ リン ツン シャ シャ コー ロ リン
十 九 八 七 七 七 八 七 六 五 九 九 九 十 九 八 七 九 九 八 七 六

ナ ナー ツー コー ロ リン ト ツ ト ナ ト ツ ト ナ ナ コ ロ リ ナ ツ ナ
五 為 斗 十 九 八 / 三 七 三 八 四 九 五 十 / 為 中 為 斗 為 斗 十 九

ト コー ロ リン テン トー ナー ト ト ツル テン コー ロ リン ツル テン コー ロ リン テ レ コ
五 十 九 八 十 八 十 八 七 七 八 五 四 三 二 三 | 三 十 九 八 十 十 十

(五)

ロ ル ツ ル テン シヤ シヤ コーロ リン ナ ツ コーロ リン ト ヲ ト テ ヲ ト コーロ リン
九 八 七 七 八 六 九 十 九 八 為 斗 十 九 八 三 七 三 八 九 五 十 九 八

ア ル ツ ル ア テン ナ ツ テ ヲ ト コーロ リン ツ ル テ ツ テン テン ツ ラ ル ス
斗 斗 斗 斗 斗 十 為 斗 十 九 五 十 九 八 七 七 八 七 八 九 十 斗 斗

ツン テン テ レ ツ テン ツ コーロ コーロ コーロ リン テン ラー ツン テー コーロ リン テン ツン シヤ シヤ コー
斗 五 十 十 斗 十 斗 中 為 斗 十 九 八 十 九 十 八 七 交 五 交 九 八

ロ ル ツン テン テン テン ツン テン シヤ シヤ コーロ リン ツ ル ツ ル コーロ リン ア ル テン
七 交 七 八 九 八 七 八 九 五 四 三 四 五 四 五 四 三 四 五 四

テ ト ヲ ト テ コーロ コーロ コーロ リン テン ツン ツ ル テ ツン ツ テン ツ ル テン ツ ル テン
五 三 七 三 八 十 九 八 七 六 五 六 七 七 八 七 七 八 九 十 七 七 八

ナ テ ヲ ト コーロ リン ナ ナ ナ ナ ナ ナ ナ ツン ナ ツン シヤ シヤ コーロ リン ツ ル
斗 十 九 五 十 九 八 十 十 十 十 五 十 斗 為 斗 九 九 十 九 八 九 八

コーロ リン テン テン テン ツン コーロ コーロ コーロ リン シヤ シヤ コーロ リン ツ ル ツ ル コー
十 九 八 十 九 十 八 九 十 九 八 七 六 九 八 七 六 七 七 七 七 八

ロ ル ナ ツン テン コーロ コーロ コーロ リン テン ツン ナ ツン ナ ツン ナ ツン テ レ テ
七 交 中 斗 為 中 為 斗 十 九 八 九 斗 九 斗 九 八 八 九 十 十 十

レ ツン テ レ テ レ ツン コーロ コーロ リン コーロ リン テン ツン
斗 八 八 八 九 中 為 斗 斗 十 九 十 斗

コーロ リン ツン テン チン テン ツン ツン シヤン チン ツン
十 九 八 七 八 九 八 七 七 斗 中 為

テン ナ リン テン テン サア ラン トッ テン シヤ シヤ テン
三 為 為 中 為 七 七 七 八 八

ツン ナン ツ ツン ナン ナン ナン ナン コーロ リン トッ テ レ テン
六 為 斗 斗 為 中 中 中 十 九 八 三 八 八 八

ツ コーロ リン ツン ツ テ ト ツ テン (ナナ) カ ラ
斗 十 九 八 七 八 七 三 八 七 五 六

ナ (ナナ) ツ ル ツン (ナナ) ツ ル ツン テン ツ コーロ コーロ
中 四 四 四 九 九 九 十 九 中 為 斗

リ ナリ ナリ ナリ ナリ ナリ ナリ ナリ テン ツ ル ツン ナ
市 中 市 市 市 市 中 十 十 十 九 九 九 為

ツ ル テ レ テ レ ツル ツル ツル テン ツル ツン ナ
七 七 八 八 八 九 九 九 八 七 七 七 為

ロ リン ナ ヲ コー ロ リン ト ヲ ト テ ヲ ト コー ロ リン
 九 八 為 斗 十 九 八 三 七 三 八 九 五 十 九 八
 テ ヲ ト コー ロ リン ツ ル テ ツン テン ツン ラ アン ス
 十 九 五 十 九 八 七 七 八 七 八 九 十 斗 斗
 コー ロ リン テン テン テン コー ロ リン テン ツン シ シ コー
 為 斗 十 九 八 十 九 十 八 七 交 五 交 九 八
 シ シ コー ロ リン ツ ル ツ ル ツ ル コー ロ リン ツ ル テン
 九 五 四 三 四 四 五 四 三 四 五 五 四
 ロ リン テン ツン ツル テン ツン テン ツル テン ツル テン
 七 六 五 六 七 七 八 七 七 八 九 九 十 七 七 八
 ナン ナン ナン ナン ツン ナン ツン シ シ コー ロ リン ツル
 十 十 十 五 十 斗 為 斗 九 九 十 九 八 九 九
 コー ロ リン シ シ コー ロ リン ツル ツル ツル コー
 十 九 八 七 六 九 八 七 六 七 七 七 七 八
 ロ リン テン ツン ナン ツン ナン ツン テン レ テ
 十 九 八 九 斗 九 斗 九 八 八 九 十 十 十

レ フン テ レ テ レ ツン コー ロ リン コー ロ リン ツン ツン ナン ツン ナン ナン ナン ナン ナン
 斗 斗 八 八 八 九 中 為 斗 斗 十 九 十 斗 中 中 為 中 十 九 五
 コー ロ リン ツン テン ナン テン ツン ツン ナン ナン ナン ナン ツル テン ツル
 十 九 八 七 八 九 八 七 七 中 為 為 七 七 八 二 三
 テン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 三 為 為 中 為 七 七 八 八 中 中 為 斗 七
 ツン ナン ツン ナン ナン ナン ナン コー ロ リン ナン テン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 六 為 斗 斗 為 中 中 中 十 九 八 三 八 八 八 九 七 八 九 八 為 斗 十
 ツ コー ロ リン ツン ツ テ ト ツ テン (ナナ) カ ラ カ ラ ツ (ナナ) ナン ナン
 斗 十 九 八 七 八 七 三 八 七 五 六 四 五 九 九 中 中
 ナン (ナナ) ツル ツン (ナナ) ツル ツン ナン ツン コー ロ リン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 中 中 四 五 四 九 九 九 十 九 中 為 斗 十 九 八 中 為 為 為 為 中
 ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 中 中 中 中 中 中 中 十 十 十 九 九 九 為 斗 十 斗 十 九 八 九 七 七
 ツル テン レ テ レ ツル ツル ツル ナン ツル ナン ナン ナン ナン ナン ナン ナン
 七 七 八 八 八 九 九 九 九 八 七 七 七 為 為 為 中 中 中 為 九

(五)

ハ テン ハ ハ ツン トッ テン ^{一列中連引連} ハーレン ツ コーロリン ツン テン テン テン コーロリン ツン テン ツン
ハ 八 ハ ハ 七 三 八 市 九 十 九 八 七 八 九 八 五 四 三 二 三 四

テン ナ ナ ナ ナ コーロリン ^散 ナ コーロリン テン ツ テ ヌ テン ナ ナ
三 為 中 中 為 中 為 斗 為 中 為 斗 十 九 八 七 八 九 十 十 為

コ ロ リン ツ ツ ル ナ テ テ レ ツ ナ ツ テ ツ ト ト テ ツ テ ツ ト ナ
中 為 斗 斗 斗 斗 為 十 十 斗 斗 為 斗 十 九 三 三 八 七 八 九 五 十 七

ナ コ ロ リ ナ ツ テ ナ ツ テ ナ ツ ト ト テ ツ コ ロ リン ト ト ナ ナ ト
九 八 七 六 七 六 五 十 九 八 七 三 三 八 九 十 九 八 八 八 市 市 七 七

ナ ナ ナ ナ ナ ツ ナ ナ ナ ツ テ ツ テ ツ ^{中列中連} コーロリン ナーラリン テン ツ トン ト テ
為 中 中 中 為 斗 為 中 為 斗 十 九 八 九 八 七 六 五 斗 十 九 八 五 十

ツ ト コーロリン ト ト テ ト テ ツン テン ナ ツン ル ナ ツ テン ツ コーロリン ト ト
九 五 十 九 八 五 五 十 五 十 九 十 九 七 七 九 七 七 六 七 六 五 三 三

ゆめ—の— らら—

ナ ト ナ ツン ナ ツン ツン テン コーロリン トン テン ツン テン テン ツン テン
八 三 八 四 五 六 七 七 八 十 九 八 三 〇 八 七 八 七 八 十 九 八 七

ふ ひ ち ぶ の
チ コ ロ コ ロ リン テ ツン テン ツ トン テ ツン テン コ
八 十 九 八 七 六 五 六 七 六 七 六 七 十

あ は ほ た — ん は も — た — ね ぶ り
ハ テン ツン ナ ツン テン コ ロ コ ロ リン テン テン
五 六 七 六 五 十 九 八 七 六 五 八 七

コ ロ リ ナ ナ ツ コ ロ リン ナ ナン ナン ナン ナ
斗 十 九 為 十 斗 十 九 八 十 十 十 十 十 十

か せ ま ひ か き
ナ ナ ナ ナ コ ロ リン ツ コ ロ リ ナ コ ロ ツ
為 中 中 為 中 為 斗 九 十 九 八 九 八 七 六

に さ か せ ま ひ
ツ ト ト ナ ナ ツ コーロリン ツン テン ツン コーロリン
九 五 五 十 七 六 七 六 五 六 七 斗 十

^中 ^引 ^連
^マ ^ン ^ン
 ツ コーロ リン ツン テン テン テン コーロ リン ツン テン ツン
 九 十 九 八 七 八 九 八 五 四 三 二 三 四
 コーロ リン テン ツ テ ツ テ ツン テン
 為 斗 為 斗 十 九 八 七 八 九 十 斗 為
 テ テ レ ツ テ ツ テ ツ ト ト テ ツ テ ツ ト テ ツ
 十 十 斗 為 斗 十 九 三 三 八 七 八 九 五 十 七
 テ ツ テ ツ ト ト テ ツ コーロ リン ト ト テ テ ト ト
 十 九 八 七 三 三 八 九 十 九 八 八 八 市 市 七 七
^中 ^引 ^連
 ナ ナ ツ テ ツ テ ツ コーロ リン サラ ラン テン ツ トン ト テ
 為 中 為 斗 十 九 八 九 八 七 六 斗 十 九 八 五 十
 テ ト テ ツン テン ナ ツル ナ ツ テン ツ コーロ リン ト ト
 十 五 十 九 十 九 七 七 九 七 七 六 七 六 五 三 三

ゆめ—の— ら—ら—

ツン ツ テン コーロ リン トン テン ツン テン テン ツ テン
 七 七 八 十 九 八 三 〇 八 七 八 七 八 十 九 八 七

ぶ ひ ゑ ち ぶ の ぶ
 テ コーロ リン テ ツン テン ツン テン ツン テン コーロ リン ツン テン
 八 十 九 八 七 六 五 六 七 六 七 六 七 十 九 八 七 八 七 六 五 三 八
 ぶ は ぼ た — ん は ぶ — た — ね ぶ う き — は お の — か
 テン ツン ナ ツン テン コーロ リン テン テン ツン テン ツン ナ テン トン コーロ
 五 六 ノ 七 六 五 十 九 八 七 六 五 八 七 六 ノ 五 六 七 八 五 中 為
 すがた — ぶ —
 コーロ リン ナ テ ツ コーロ リン ナ ナ ナ ナ ナ ナ ナ ナ ツン ツン ツン コーロ リン ナ
 斗 十 九 為 十 斗 十 九 八 十 十 ノ 十 十 十 十 十 九 八 九 十 九 八 中
 — か — せ — ま ひ — お — き — む すがた
 ナ ナ ナ ナ コーロ リン ツ コーロ リン ナ コーロ ツン ナ ツン テン テン
 為 中 中 為 中 為 斗 九 十 九 八 九 八 七 六 六 七 六 ノ 五 六 七 七 七
 — に — さ か — せ — ま ひ — お — き — む —
 ツ ト ト テ ナ ツ コーロ リン ツン テン ツン コーロ リン コーロ リン テン ツン ナ
 九 五 五 十 七 六 七 六 五 六 七 為 斗 十 十 九 七 七 〇 六 〇 七 〇

千鳥之曲 古今調子

第一 絃ヲセ、絃マデ上ケテ全音トナシ、第四絃ヲ一音上ケテ双調(ト)トナシ、第九絃ヲ
 第二 四絃ノ裏ノ双調(ト)トナシ、クル者ナリ

中羽六弦流丸
 シヤーン シヤン ル レ ツン カ ラ カ ラ テン シヤン カアー リーン テン
 五 〇 | 五 九 十 斗 八 九 七 八 為 } 五 六 〇 五

十絃ヲ押テ全時ニ彈ズ
 カ ラ カ ラ ツン シヤーン シヤン シヤン シヤン ツレン ツレン カ ラ
 三 四 三 七 } 五 〇 五 八 五 八 斗 〇 | 五 六 七

まほ の
 テン ツ ツン テ ツン テン ツン シヤーン シヤーン テン ツン
 七 ノ 八 九 十 斗 為 斗 五 〇 | 十 九 〇

ま さき で
 ロ ル シヤーン シヤーン シヤーン シヤーン シヤーン カ
 為 斗 五 〇 } } 五 〇 五 〇 五 〇 } } 五 〇 三

以そ 以
 カ ラ カ ラ テン シヤーン ツン ツン テン ツン
 } 六 七 五 六 十 〇 } } 五 〇 九 九 十 } 九

すむ ちど
 シン ツン コ ロ リン シヤーン シヤーン シヤーン シヤーン
 十 斗 七 ノ 為 斗 十 九 〇 斗 〇 五 〇 } } 五 〇 } } 〇 斗 } 為 斗

中羽六弦流丸
 ツレン ツレン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン
 } 為 為 斗 } 斗 十 } 七 八 九 十 斗 } } } 八 九 七 八 為 〇 為

れみ か みよ
 〇 } 七 七 為 〇 五 六 六 斗 } } 斗 為 中 } 為 中 為 斗 十 九 十 斗

を ば やち
 シン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン
 為 斗 五 〇 } 九 十 } 七 〇 七 〇 七 〇 五 } } 五 〇 五 〇 五 〇 } } 五 〇

とぞ おく
 カ ラ テン テン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン ツン
 五 〇 五 〇 五 〇 五 〇 五 〇 五 〇 五 〇 五 〇 五 〇 五 〇 五 〇 五 〇

中羽六弦流丸
 ツン カ ラ カ ラ シヤン シヤン シヤン シヤン シヤン シヤン
 斗 八 九 七 八 為 } 五 〇 六 〇 五 四 五 } 六 五 六 三 四 三 三 七

茶音度

六上ゲ調子 (中空トモネフ)

平調子ノ六絃ヲ半音上ケテ盤渉(口)トナシ斗ノ絃ヲ半音上ケテ六絃ノ裏ノ盤渉(白)トナシ七絃ヲ一音下ケテ神仙(八)トナシ為ノ絃ヲ一音下ケテ七絃ノ裏ノ神仙(八)トナシタル者ナリ

緩徐= 舌のあかに

テーン トン ツン テン
六 〇 三 五 六 } 斗 十 九 } 三 八 〇

フン ツン } 七 七 } 七 七 } 七 〇 六 五 六 七

は ぶ — は — よ — 志 — の — ヤ — ま — も — み — ち —

トン テン ツン テン ツン コーロ リン ツン ヤ ヤ コーロ リン } 七 七 } 七 〇 六 五 六 七

三 八 九 八 九 中 為 斗 十 九 九 } 八 七 六 } 七 十 } 五 五 十 五

は — ち — つ — ね — 茶 は う ぶ — の — み や — こ —

テン ツン テン ツン コーロ リン テン カ ラ カ ラ ツン テン ツン } 七 七 } 七 〇 六 五 六 七

十 斗 中 為 斗 十 九 八 五 六 四 五 九 十 九 } 十 九 八 } 七 七 } 七 八

の — た — つ — } — それ — よ — て —

ローン ツン テン ツン コーロ リン テン コーロ リン テン ツン テン ツン } 七 七 } 七 〇 六 五 六 七

七 六 七 八 九 中 為 斗 十 九 八 九 八 } 七 六 七 八 } 〇 七 〇 六 } 五 六

も — さ や —

テ ツン テ ツン テ ヤ テ コーロ リン ツン テ ツン テ ツン } 七 八 九 十 } 斗 十 九 } 三 八 〇

三 二 三 四 五 六 五 四 五 六 七 八 九 十 斗 十 九 } 三 三 八

は — み や — ぶ — の —

トッ テン } 三 八 } / コーロ リン テン テン } 八 七 六 七 六 } 五 四 四 } / 三

テ テン トン トン テン テン ツン } 斗 為 八 八 } 中 為 } 斗 為 十 斗 十 } / 三

た ね — が — ち ね — ぶ —

トッ テン } 七 九 } / テン ツン } 九 九 } / 斗 九 九 八 十 } / 三

の — い ろ — の —

ツン テン ツン } 七 六 } / テン ツン } 七 八 九 六 十 } 斗 斗 } 七 九 } / 三

ま つ — の — く ら —

ル ス } 五 六 五 六 七 } / テン テン テン } 三 八 十 九 八 } / 七 八 七 } / 三

く ら — べ — て —

ヤ } 五 六 五 四 五 } / ツン テン } 四 三 } / テン テン } 五 六 七 八 九 五 } / 三

茶音度

六上ケ調子 (中空トニエフ)

ナレ斗ノ絃ヲ羊音上ゲテ六絃ノ裏ノ盤渉(白)トナシ七絃ヲ一音下
ゲテ七絃ノ裏ノ神仙(六)トナシタル者ナリ

吾のあかひ

まぐれ

ヤーン
三合八
ツン ツン
七 } 七 }
中ヨリ七迄連
サア一ラリン
ツーン テン ツン テン ツン
七 } 七 } 七 } 七 } 七 } 七 }
七 } 七 } 七 } 七 } 七 } 七 }

のやま

もみ

リン ツン ヤ ヤ コーロ リン
九 九 四 四 八 七 六 } 七 } 十 } 五 五 } 十 五
中ヨリ九迄連
サア一ラリン

茶はら

みや

ラ カ ラ ツン テン ツン テン ツン テン ツン
六 四 五 九 十 九 / 十 九 八 七 } 七 } 八
中ヨリ九迄連
サア一ラリン

それ

よ

リン テン コーロ リン テン ツン テン ツン
九 八 九 八 七 六 七 八 〇 七 〇 六 / 五 六

さや

リ ツ テ ツ テ ツ テ コーロ リン
四 五 六 七 八 九 十 斗 十 九 } 三 三 } 八
中ヨリ九迄連
サア一ラリン

(空)

は みや 大 の ひつ 志 さ る

トッ テン コーロ リン テン テン テン ツン ツン
三 八 / 八 七 六 七 六 五 四 四 / 五 六 } 七 } 七 } 八 九 十 六 六
中ヨリ九迄連
サア一ラリン

斗 為 八 八 中 中 為 斗 為 十 斗 十 九 西 西 九 五 六 四 五 九

テ テン トン トン テン テン ツン テン テン ツン コーロ リン トン トン テン
斗 為 八 八 中 中 為 } 斗 為 十 斗 十 九 } 西 西 九 } 五 六 四 五 九
中ヨリ九迄連
サア一ラリン

たれ が お母 糸 て て ま の 茶

中ヨリ九迄連
サア一ラリン
テ テン ツン テン ツン テン テン コーロ リン テン ツン
七 } 九 } 八 九 } 斗 九 九 八 十 九 八 七 六 五 五 } 六 五 } 六 /

のいろ のふか み ど

ツ テン テン ツン テン ツン テン ツン 中ヨリ九迄連
セ / 六 } 七 八 九 六 十 } 六 斗 } 七 } 九 } 斗 〇 九 / 九 八 七 六 五
中ヨリ九迄連
サア一ラリン

まつ のくら

ル テ ツ テ ツ テン テン テン ツン テン ツン テン ツン テン
五 六 五 六 七 } 三 八 十 九 八 / 七 八 七 六 / 八 七 六 五 七 六 五 四
中ヨリ九迄連
サア一ラリン

くら べ て と かまひと

ヤ テ コーロ リン テン ツン ツン ツン ツン テン コーロ リン
四 五 六 五 四 五 四 三 五 六 七 八 九 五 六 中 為 斗 十 九 } 三 三 } 八
中ヨリ九迄連
サア一ラリン